

系圖ヲ按スルニ、若狹守兼朝ナシ、古老謂ラク、兼演公ノ次弟刑部少輔兼利ノ長男兵部少輔兼岡ノ後ノ名ナリト、御一族ノ中、殊ニ威勢アリテ奢ヲ究メ、剩隱謀ノ

企露顯スルニヨリテ、新納三河守ヲ將トシテ若狹守父子并ニ其黨類備前守以下之ヲ誅戮セラル、

備前守モ亦系圖ニナシ、或記水保御陣ノ人數賦ニ加治木ノ物頭ノ内ニ載ス、故老以謂、紀伊守兼隆ノ更ノ名也ト、

坂口織部若狹守ヲ斬リ、松崎越後備前守ヲ討ト云

ミ、此時主税權助故主税權助兼致猶子也悉ク御氏族ヲ亡サル

カト疑恐レテ、宮内ニ出奔セラル、

公怒テ終ニ帰參ヲ許サレス、權助主ハ實ニ宮内ノ

社家桑幡氏ノ子ナリ、一族來テ迎之キト云云、

或説云、若狹守隱謀ヲ企 兼寛公ヲ呪咀スルノ

夏、公御上洛帰郷ノ後、治定スト云ミ、然レハ、

天正十二年ノ冬カ十三年ノ夏ナルヘシ、爾後新

納三河守先是屬旗下、溝邊ノ地頭職ニ補セラル、後ニ加

賀守兼守代之ト云、

(表紙)

肝付世譜雜錄
六

(表紙)

兼三 加治木 喜入
自天正十八 至文祿四
肝付世譜雜錄

○公御早世マシ、テ御子ナシ、故ニ伊集院右衛門門太夫忠棟入道幸侃ノ三男字中將後嗣トナリテ當家ヲ連續ス、元服シテ三郎五郎兼三ト号ス、

傳云、公始顯姓氏ノ女ヲ迎ト云ヘトモ、早世ニヨリテ昌安妙繁大姉ト号スト云々又曾於郡本田氏ノ女ヲ迎、故有テ離

別、其后簾中ナシ、天資女色ノ道ヲ疏ンシ給ヒ、ソノ上多病ニマシ、ケル故ニヤ、終ニ御子ナシ、是

ニ由テ幸侃其男ヲ以猶子タランコトヲシハ、強ラル、ニヨリ、トカク斟酌シ玉フト云ヘトモ、度重レ

ハ黙止カタク、公終ニ諾シナカライマタ果シタマハサル中御他界マシ、ケリ、依テ幸侃イヨ、我

老臣ニツノラレケレハ、御一族老臣寄合相議シケルハ、去ル天正十五年殿下當国下向ノ時、御降參ナキ

ニヨリ御身上ノ義イマタ落着シカタキト云、殊ニ當時幸侃ノ權威何莫モ恣ナレハ、若違義ニ及ハ、イト

、悪様ニトリ成サレンハ、目ノ前ニ在カ如シ、サレハ、公モ是ヲ思召サレテソ今迄ハモタシ玉ヒケン、

公御他界ノコトナレハ、猶去カタキ上ハアラマシ、

御約諾ノ旨ニ任セテ、御養子ノ義ヲ申上ヘキニ一決

シテケレハ、龍伯公・武庫公・又一郎久保公高聞

ニ達シ、願ノ如ク、仰出サル、于時、太守御在京、

久保公ハ関東小田原ノ役ニ赴玉フノ間、松崎出雲介

京都・小田原ニイタリ言上スト云々、

○六二七 肝付兼三指出

大隅國加治木・溝邊・三鉢堂留地指出、

一紙目録之事、

合 天正十九年

一田方 參百八十九町四段七畝廿四步

門屋敷以上
貳百十五

此分米 京判

此内七百八十七石九斗五升二合者赤物

四千貳百八十八石九斗三升壹勺九撮

一島方 四百七十町七步

此分米 京判

五百二十石七斗八升九合五勺

都合

田島八百五十九町四段八畝老步

此分米四千八百九石七斗一升九合六勺九撮

此内門屋敷付千四百五十八石五斗六升七勺

右之内

千七百七石八斗者

作得分

二百七石五斗二升六合四勺者諸佛神領仏供祭礼之入
百五十七石五斗九升四勺者 赤物之減
目

定納分

參千三百卅六斛八斗二合八勺九撮

山畑 九十六石三斗蒔

茶二百五十一斤摘 桑千七百九本

樹木

柿七十八本 漆七十五本 密柑三本

九月二日 肝付中將

○六二八 肝付兼三指出

大隅國加治木・溝邊・三鉢堂三ヶ名差出、

一紙目錄之事、

一田方 門屋敷以上二百十五

四百廿四町八段老畝七步 此内ニ荒左荒籠也

此分米 京判

四千三百四十二斛九斗二升六合此内

作得分 千百卅三斛五斗九升八合二勺

定納分 三千二百九斛三斗二升七合八勺

一島方山畑百姓居屋敷三口合

六百十七町四段三畝十五步

此大豆 京判

千卅七斛一斗七升八合此内

作得分 二百九十七斛四斗三升五合六勺

定納分 七百卅九斛七斗四升二合四勺

一田島都合

千四十二町二段四畝廿二步

此分米并大豆

五千三百八十斛一斗四合此内

作得分 千四百卅老斛三升三合八勺

神事入目 三百五十七斛五斗二升六合

諸職分 百八斛五十七升

米定納

貳千七百五十壹斛八斗一合八勺此内七百八十八石三斗二升者赤物

此外ニ大豆定納

七百卅壹斛一斗七升二合四勺

都合定納惣高

參千四百八十二斛九斗七升四合二勺

以上

一宮内正八幡御神領懸持分

一田方 七町七段八畝十五步

此分米 京判

九十石壹斗六升二合此内

作得分 十八斛三升二合

神役入目 十斛

定納 六十二斛壹斗三升

惣高 參千五百四十五斛壹斗四合

以上

天正十九年十月十九日、於栗野へ相定狀
如斯、

〇六二九 某指出

溝邊之村當地差出事、

一田方七十三町二杖一步 門屋數
已上百也

此分米八百六石六斗五升者

一畠方百六十町五反二杖

此分米百六十二石三斗者

都合九百六十八石九斗五升者

此内

九十四斛七斗三升六合五勺二分宛兼中持そん免

百卅九石五斗六升三合五勺三分宛門付分

合二百卅四斛三斗者

損免

五十三石三升者

御祭修正之入目

定納分

六百八十一石六斗二升者

山畑四十四石二斗六升蒔在之、

樹木 桑八百四十二本 茶十九斤

柿十本

漆十五本

右一通へ前ノ二通ニ時代不同モノ、如シ、然レトモ類ヲ以ノ故ニ
一所ニ寫シ置者也、

○六三〇 阿多盛淳外二名連署違書

隅州正八幡領之内、加治木ニ在之浮免分七拾壹石四斗八升六合三勺之儀、四拾五石之定請ニ御侘付而、其分申定候、自然風干水損雖在之、全可有收納之由候、然上者、滿作之時も四十五石之外不可有違乱候、被成御檢地、田畠出分等在之共、右之通不可相違条、可被得其意事肝要ニ候、恐々謹言、

天正廿一
正月十七日

鎌田出雲守
政近判

町田出羽守
久倍判

長壽院
盛淳判

肝付中將殿

參

(本文書ハ「旧記雜錄後編二」一〇四三号文書ト同文ナリ)

○六三一 肝付兼三証状案

案文

隅州正八幡領之内、加治木ニ在之浮免分七拾壹石四斗八

升六合三勺之儀、四十五石之定請ニ中將御侘被申上之処ニ、御同心忝候、然上者、毎年爲御蔵米四十五石進納可仕候、縦天下一同之風干水損雖在之、收納不可有相違候、爲後日之狀如件、

正月十七日

鎌田出雲守殿

町田出羽守殿

長壽院

(本文書ハ「旧記雜錄後編二」一〇四四号文書ト同文ナリ)

○文祿元年壬辰高麗ノ役、加治木ヨリ騎馬三人五兵衛尉兼堯雅樂助兼有二男・前田新藏隠州男・隈本加兵衛尉淡州男
其外歩卒數十人渡海、

○同二番立、狩野介兼仍公・前田左近・志々目藤林坊志々目源右衛門義陳之祖以上騎馬三人、其外岩田彦兵衛等歩卒數十人相從渡海スト云々、

文祿四年乙未九月、兼三隅州加治木・溝辺・三躰堂ヲ

轉シテ、薩州給黎郡ノ内喜入及ヒ同国河辺ノ郡ノ内宮
清水ヲ領ス、凡知行高五千四拾七石四斗、

文祿四年
九月三日

本田下野入道
三清判

伊集院右衛門大夫入道
幸侃判

〇六三二 伊集院忠棟・本田三清連署知行目

録

薩州喜入郡

惣高三千六百廿五石七斗五升貳合

河邊之内

清水村

惣高八百五拾六石八斗六升七合

川邊

宮名之内

五百六拾四石七斗八升壹合

合五千四拾七斛四斗

右之分、為返地被遣候、但五斗出米納之以員數可被遣
旨、於京都石治少様御談合相定候、若加増之儀有之
者、御兩殿御意次第可致分別候、本目錄者追而可爲
御給、仍如此、

肝付中將殿

今ニ於テ加治木・溝邊・三躰堂ヲ以テ喜入・清水・
宮名ノ内ニ控フルニ、地ノ廣狹貢賦ノ多少其半ニモ
及ハサルカ、其故イカント尋ヌルニ、世俗ニ相傳テ
云、其比一段ニツイテ五斗充ノ出米ヲカケラル、而
シテ去ル天正十九年、田畠年貢等ノ員數ヲ書出サシ
ム、過分ノ役米ヲ迷惑スルニヨリ分量ヲ減少シテ書
出歟ニヨリテ、今返地ノ高如斯シト云々、其實ヲ知
ラス、

○同十月廿六日、加治木ヲ去リ喜入ニ遷リ給フ、此時陪
從ノ士七百餘人ト云々、

傳ニ云、喜入先給人喜入氏ハ鹿籠ヲ領シテ移ラル、
依テ其舊跡ヲ構テ宅トス、分内尤狹シテ諸士居宅ノ

地ナシ、故ニ方々所々ニ分チ居ラシムトイヘトモ、猶不足ニ及フト云々、

又傳ニ云、加治木御居住ノ時ハ御氏族ヲ始メ譜代舊功ノ歴々、過分ノ所領ヲ賜リ、其外末々ノ御家人マテ分々ニ隨テ御扶助ヲ受ルモノ凡千余人ニ及ヘリトカヤ、今喜入ニ移テ其分限ニ応シテ所領ヲ減少セラレシカハ、ヲノノ其困窮ニ迷惑シテ大半御家中ヲ辞シ去リ、又加治木・溝辺・三鉢堂ノ内ニイマタ在宅シテ移ルコトヲ得サルノ御家人等ハ、是ヲ聞テ直ニ本ノ在所ニ住居シテ長ク他ノ被官トナルモノ多シト云々、

此時日木山玉繁寺ヲ鶏頭山鶏頭或説ニ溪頭ニ作ルニニ移シ喜入氏ノ時ニ也、故山号、瑞泉山心慶寺ヲ生見ニ移今龜王山源、長禪寺ノ舊跡用鶏頭云々、存庭院ヲ瀬々串ニ移シ、高源山利翁寺ヲ寶杖山ニ遷シ、椿窓寺ヲ宮地ニ移シ、長松庵ヲ假屋崎ヘ移シ松隣齋長居士ノ位牌所、秋岳庵ヲ有田ニ移ス秋岳妙椿大師ノ位牌所、椿窓寺・長松庵・秋岳庵今ニ於テハ廢壞セリ、其旧跡猶傳テ口頭ノ牌ニアリ、

○慶長二年丁酉、後朝鮮ノ役、兼三兵士三百餘人ヲ卒テ渡海、加徳城ニ在戍ス、九郎左衛門尉兼昌・前田久右衛門尉盛張・隈本與兵衛尉・志々目次助・岩田又兵衛尉・山口讚岐守・南條十左衛門尉・内村源左衛門尉等此外不記姓字相從フ、

傳ニ云、先年殿下御下向ノ時、兼寛公御降參ナキニヨリテ、先高麗ノ役加治木ヨリ兩度人衆少々ツ、渡海スト云ヘトモ、當家ノ勢ト称スル吏ヲ得ス、是ニ由テ伊集院幸侃名護屋ニ於テ殿下ニ申サレケルハ、故肝付彈正忠遺跡ヲ三男兼三ニ賜テ嗣シメハ、彼家ノ人衆數百人引卒シ渡海セシメンモノ也ト云々、殿下是ヲ許容セラル、因テ此度ハ兼三幼稚ナリト云ヘトモ乳母ヲサシ添渡海セシムト云々、

同五月、兼三幼稚ニシテ軍務ニ益ナシ、故ニ免サレテ帰朝ス、是ニ由テ前田久右衛門尉盛張ヲシテ諸卒ヲ領シ軍吏ヲ勤メシム、志々目次助軍衆ノ代官タリト云々、

私云、軍衆ノ代官考ルニ、盛張時ニ家老タリト雖御代官トナルノ故ニ、次助代テ家老ノ吏ヲ執行モ

ノカ、

盛張御名代ノ事 御記録所案ニ云、

喜入

前田久右衛門尉盛張

右者、肝付彈正主于加治木城、先是 殿下秀吉公西

征ノ時、不降居城忽病死焉、由是先朝鮮入之時、盛

張等彼家兵士領三百余人渡彼國勞軍務、其後伊集院

幸侃之三男三郎五郎爲彈正之後嗣移于喜入、後渡海

之時、副乳母三郎五郎渡朝鮮國、然而幼稚無益軍

事、以許婦朝、使盛張爲代官宰渠之兵、至歸陣節堅

勤軍事矣、

先高麗ノ時、盛張兵ヲ帥ノ義 公義ニ於テ歷然ノ吏

アルカノ由、然レトモ當家ニ於テ其説ヲ不傳トコロ

ナリ、但彼家前田ニ相傳テ曰、盛張先朝鮮役ニ赴ノ

處ニ京衆下向シテ御分國檢地ノ吏アルニヨリ、中途

ヨリ召還サルト云々、

○同三年戊戌九月、泗川古クハンノ城へ軍勢ヲ籠ラル、

當手ノ軍士八人ヲ出ス、全廿七日、漢南人來攻ルノ

時、右八人ノ内内村源左衛門尉戰死ス、

○同十月朔日、泗川表へ大明人猛勢襲ヒ來ル、義弘公・

忠恒公御合戰、悉ク之ヲ追崩シ、敵三萬八千余討取

リ、武名ヲ異域本朝ニ播玉フ、斯時ニ於テ當手ニ討取

首數一千六級、

○六三三 泗川表戰死者交名

當手戰死ノ人數、

鳥井與八兵衛尉 南藏坊 前田藤市

宮田木工 下村大學 河本吉右衛門

吉井源六兵衛 二見大藏 早崎六右衛門

古江半右衛門 長田三兵衛 緒方十郎兵衛

安樂仲右衛門 古川三右衛門 小者助六

以上十五人

○同年十二月廿六日、前田盛張以下ノ軍士喜入へ歸着、

是ハ去ル八月殿下薨スルニヨリテ諸軍勢悉ク婦朝、霜

月十五日、泗川ノ湊ヲ出船、博多ノ今津ヨリ御暇ヲ下

サレ、昨廿五日、坊ノ津へ着船スト云々、

淡路守

全四年己亥春、伊集院幸侃隱謀ノ企露顯ニヨツテ伏見

前田久右衛門尉盛張

ニ於テ誅ニ伏ス、時ニ兼三モ亦伏見ニアリ、帰國セシ

メ直ニ阿多ニ蟄居シ、遂ニ谷山ノ梯ニ於テ誅セラル、

傳ニ云、此時前田宗左衛門尉隱岐守盛俊男子時撰・加塩

五郎左衛門尉後改野村兼三ニ從テ伏見ニアリ、兼三ト

同意セサルノ旨聞シ食分ラレ、父祖代々ノ武功ニヨ

ツテ兩人共ニ直ニ召出サレ、前田ハ今子孫日州栗野

ニ住ス、野村カ子孫ハ薩州出水ノ邊ニ住スト云々、

又云、兼三ニ始終附從フ土隈本六郎左衛門尉淡路守宗

清男・同有心治部少宗堯入道宗清弟也・古江城介阿多ニ於テ野伏ノ爲ニ

害セラルト云等也、

兼寛公ヨリ兼三ニイタリ家宰

佐渡守

隱岐守

隱岐守

限本淡路守宗清

(表紙)

肝付世譜雜錄

七

大英公 喜入
 自文禄四年
 至慶長十四年
 了源公 喜入
 自慶長十四
 至寛永二年

肝付世譜雜錄

肝付世譜雜錄卷之五

六代
兼篤公

小五郎 狩野介 伴兵衛尉 越前守

始名兼仍 幼字鶴壽丸

○永禄五年壬戌御誕生、兼盛公ノ次男、母ハ菱刈兵

庫頭重根ノ女、秋岳妙椿大姉、

○慶長四年己亥、兼三當家ヲ去ル、是ニ於テ 公家

督ト爲ッテ越前守兼篤ト稱シ給フ、

兼三事ニ坐シテヨリ新納武州入道殿ヲ始メ御親

戚中相議アツテ、故彈正忠兼盛ノ實子タルノ

際、兼仍ヲ家督トシテ當家相續ノ義御訴訟ア

リ、龍伯公聞召レ、故兼盛拔群ノ功勞忠烈聊

以テ御亡失ナシ、且兼寛カ武勇ト云、彼家ノ義

ニ於テハ断絶ナキ様ニ仰付ラルヘキ旨、御懇ノ

上意ニテ、武蔵入道殿ニ伴兵衛尉家督ヲモ相續

スヘキ器ナリヤ否ノ御尋ニ及ノ處ニ、入道殿ヨ

リ兼仍生質辨舌明ナラストイヘトモ、勇武ノ道

ニ於テハ父彈正忠ニナトカ劣ルヘキ器量ナラス

ト言シ上ラレ、實子余義ナキ上ハイヨ／＼兼仍
家督タルヘシト、 惟新公 忠恒公共ニ御同心

ニ仰出サレ、拜禮ノ時越前守ニ任セラレ御刀一

腰清貞拜領シ給フト云々、 兼寛公御卒去ノ時、

即御相續アルヘキノ處ニ、幸侃ノ逆威ニ依テ空

シク數年ヲ送り給フト云ヘトモ、天命ノ歸スル

所遂ニ斯ノ如シ、

○六三四 前田盛張起請文前書案

家宰前田久右衛門盛張進上ノ誓紙案

起請文前書之事、

一奉謹言上、今度幸侃 御成敗ニ付而、三郎五郎無分別

之格護之様子承、奉驚存候、彼進退之儀者可爲御意次

第候事、

一古彈正忠為 御奉公之一筋家之儀、無断絶様ニ、乍恐

奉頼存候事、

一富之隈・鹿兒嶋・帖佐三方之御奉公、弥々無別儀可抽

忠貞候、自然相背族等於在之者即可申上候、乍勿論、

縦雖為親子兄弟縁者知音、同意申問敷候事、
右之旨若於僞申上者、

○六三五 島津義久宛行状

龍伯君ヨリ盛張へ頂戴ノ御書

古肝付彈正忠武勇無其隠候、其跡可有取立候、家中ニ前
田代々之戦功無比類候、為其忠直召出、高四十石所宛行
之状如件、

年月日切レテ闕

義久御判

前田久右衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」七九六号文書ト同文ナリ)

右ノ旨、 仰出サルト云ヘトモ、當家継目諸事

心遣ノ折カラニ候ヘハ、直參ノ義ハ御免ヲ蒙ル

ヘキ旨申上、御書計ヲ頂戴スト云々、

○兼三ノ亘ニヨリテ河邊郡ノ内清水八百石餘ノ所領

ヲ削リ除カル、 惟新公聞シ食及レ、故彈正忠忠

勤ノ跡トシテ仰付ラルノ處ニ、瑕疵ヲ付ラルヘキノ条如何ノ旨、御書ヲ以虜府ヘ仰遣サルトイヘトモ、公議既ニ決スルノ故、重テ御沙汰ニ及ハスト云ミ、實ニ當家ノ不幸ナリ、

右ノ御書加治木ノ新納仲左衛門某ノ家ニ相傳ノ由ナルニ付テ、久兼公ノ時其写ヲ乞求ラルトイヘトモ、今ニ於テハ公府ノ文庫ニ藏テ無之由ヲ申サレキ、

○同年、幸侃ノ嫡子源二郎忠真日州庄内ノ都城ニ楯籠リ、ソノ外安永・山田・志和地・野之三谷・高城・山之口・勝岡・梶山・梅北・末吉・財部・恒吉十二ヶ所ノ城ヲ構テ各兵ヲ分籠テ守ラシム、是ニ由テ、

惟新・忠恒兩尊君數万ノ軍士ヲ催シ御追伐ノ時、公喜入ノ勢ヲ從ヘテ発向シ給フ、

同九月十日、東霧嶋ノ御陣ヨリ野之三谷ノ城ヲ攻撃給フ、公及川田大膳亮・阿多長壽院・上井仲五・數根仲兵衛尉搦手ノ大將トシテ相向ハル、城

ノ本人有屋田大炊左衛門尉并ニ加番古垣與兵衛等克防テ、寄手ノ軍利アラス引退ノ時、公後陣ニ扣ヘテ勇敢ノ働ヲハシケリトナン、其外此陣中度々戰勞アリ、故ニ五兵衛尉兼堯・新納十右衛門尉久信・志々目源左衛門尉義里等疵ヲ蒙ルモノ多シ、

傳云、寄手クツレテ引ケル時分、公ヨニモ口惜キコトニ宣ヒ、必死ヲ究メテ返シ合セ追ヒ来ル敵ヲコミ返シ、猶働入ントシ給フ處ヲ左右ヨリ押ト、メ奉ル時ニ、何某或説ニ長壽院走行ク勢ニ向テ、キタナクモ見ヘ候モノナカナトノ、シリ給フニ、公遙ノ跡ニ旗ヲシ立テ、肝付越前守是ニ在ト呼テ扣ヘ玉フ、由々數見ヘシトニヤ、此時御旗指ノ星隈權内ト云モノ甲斐々々數走回リケルト云云、又此時ノ事ニヤ、庄内ノ陣中ニ當家ノ士北原某蹄北原ノ一族也
北原亡後屬旗下味方敗軍ノトキ一番ニ逃タリケルヲ、歴々トテ平生傲リシニモ似ヌ拳動カナト上下笑ヒケレハ、口惜コトニ思ヒ、翌

朝只一騎敵城ニ向テ呼ハリケレハ、城ヨリモ堀ノ上ヨリ出テ、何者ソト問ニ、北原某一名乗テ

勝負ヲ決セント乞望ム、サレトモ敵如何ハ思ヒ

ケン、一人モ出合ネハ、カナク北原引返シケル

處ニ、當手ヨリ城方ヘ内通スルカノ風聞アルニ

ヨリテ御糺明アリシカハ、シカ／＼ノ次第ナ

リ、即北原御追放ナリト云、

又云、中野新之丞此陣中毎度勇ケナル働トモ多

リキ、或時敵ヲ追ツ掛ケ堀ノ上ヲ乗り越ントシ

ケルヲ、アトヨリ追付太刀ノ鞘ヲ取テ引ケレハ、

鞘ハカリ引抜テケリ、此時出水衆何某一處ニ相

働互ニ其名ヲ太刀ノ鞘ニホリ付置、軍散シテ

後、右ノ出水衆中野ヲ尋テ来、右働ノ様子トモ

語リケレハ、諸人此間中野カ音モセテ居タルコ

トヲ不審ル、中野申ケルハ出水衆生テアレハ、

既ニ斯ノ如シ、若討死ヲモセマシカハ證拠ナシ

ト思ヒテソ語ラサル所ナリトテ太刀ノ鞘ヲ出シ

ケリ、皆人中野カ朴實ヲ感セシトニヤ、

○慶長五年庚子ノ夏、前田盛張ヲシテ喜入ノ士衆ヲ帥ヒ上洛セシム、

○六三六 新納忠元書状

新納拙齋翁ノ狀

其表御軍勞之由雖承及候、互遠路故申隔候之處、自京都之書狀遮而被遣候、御丁寧之至畏入候、其方無為御座候哉、爰元御同前候、仍喜入衆大方大坂被參候欵、肝要之儀候、残而二三人候之由、如何之分別候覽、是非之外候、彼衆替御のほせ候て可然由、弥太右衛門尉申事ニ候、鎌雲州へ被得御意候而肝要候、猶追々可申承候、恐々謹言、

七月廿一日

新武入
為舟判

前田久右衛門尉殿

御返報

(本文書ハ「旧記雜錄附録一」一二七号文書ト同文ナリ)

右ノ支家傳詳ナラス、蓋シ 大樹家康公會津ノ

上杉氏征伐ノ爲、是歲六月、洛ヲ出テ奥州ニ向給
 フ時ニ、 惟新公御在洛三州ノ軍勢ヲ召スニ依
 同上京スル者也、而シテ 惟新公東征ニ從ヒ給
 ハス、全七月、石田三成ニ與力シ伏見ノ城ヲ
 攻、全八月・九月、濃州諸所ニ於テ攻戰ノ事ア
 リ、九月十五日、関カ原ニ於テハ、 惟新公尾
 州ノ太守左中將忠吉・井伊直政ト御合戰ナリ、
 右數度ノ戰場ニ於テ、豈盛張等カ軍務無シヤ、
 然ト雖軍中及、下向ノ時ニ至リ家傳ノ旧記并ニ
 口牌ノ傳ルモノナシ、惜ヒ哉、
 編年小史ヲ按スルニ、後陽成帝慶長五庚子春、
 奥州会津上杉景勝有叛武命、六月十六日、 源
 君出洛向奥州、家嗣 秀忠公及侯伯士衆從征、
 七月、石田三成謀叛、畿内・西海・北陸昇沸雲
 擾、八月略、廿日、東軍先鋒到尾州清洲、勢州穴
 津城拔、廿三日、拔岐阜城略、九月朔、源君発
 江戸、秀忠公向山道而上、十四日、源君到濃州
 赤坂、十五日、兩先鋒福嶋正則・池田輝政并諸

將大軍競進、秀秋及脇坂・朽木・赤座等反内攻
 大谷・平塚、戸田皆死于垂井口、正則・加藤嘉明・黒田長政等
 更攻三成、行長等于関原、輝政、本田忠勝、浅野幸長等攻長
 曾我部盛親等于岡鼻、藤堂高虎、京極高政等攻、岨強難當、
 浮田秀家等、忠吉君并井伊直政等攻島津義弘、
 直政被疵、然及未時西軍潰、毛利輝元・吉川、
 元春乞降云、

○慶長六年辛丑月日不記、鶴壽君兼武公喜入ニ御誕生
 ナリ、

○同八年癸卯月日不記、御館ニ於テ志々目源左衛門義
 里聊ノ吏ニ由テ短慮ヲ起シ、扇子ヲ以テ伺候ノ人
 ヲ打擲ス、事不意ニ出ツト雖、 御前ヲ憚カラス
 奇怪ノ所行罪ヲ逃ル、ニ所ナシ、是ニ由テ御勘氣
 ヲ蒙ルト云々、

○同九年甲辰四月、義里赦免セラレテ帰參、神判ヲ
 以テ一通ノ疑状ヲ奉ル、

○六三七 志々目義里起請文

起請文

一去年於 御館、不慮之篇目出合申候、其恐不少奉存候
 条、東堂様奉頼愚意為可申述、即玉繁寺ニ馳參申候

キ、情奉案之不輕御事候間、先以致物詣為一途之由緒
訴訟為可申上、他方へ罷出候、此旨奉對兼篤様 羈壽
様少茂別心無之御事候、然處以忝 上意被召置、則本
領安堵被仰付之条、誠々過分之至難申上盡候、自今已
後無吳儀可致御奉公候上者、於 御子と御孫とニ茂相
違有間敷候事、

右條と毛頭違犯之儀於御座候者、

奉始上梵天帝釋四大天王 下堅牢地神、惣日本六十餘州
大小神祇、別當國鎮守新田八幡大井 開闢正一位、取分
當所鎮守三百餘社大明神 諏方上下大明神 稻荷 祇園
春日 若宮勸請明諸神 天滿大自在天神 御部類眷屬等
神罰冥罰可能蒙者也、

仍起請如件

慶九

卯月二日

志、目源左衛門尉

儀不見判

限本淡路守殿

新納十右衛門尉殿

○慶長十年乙巳月不詳、不思議ノ内乱有テ家中騒動

ニ及ヘリ、其濫觴ハ 公ノ叔父ニ雅榮助兼有ト云
人ヲハシケリ、曾テ 太守ノ幕下ニ直參シ、天正
年中加治木ヲ出テ一節日州曾井ノ城ニ移リ、地頭
比志嶋式部太輔ノ手ニ属シテ奉仕ナリシカ、其後
アナタコナタ経歴セラレシカトモ、意ニサセル立
身モナクサテ終ラレケリ、其二子長ヲ甚左衛門尉
兼秋、次ヲ五兵衛尉兼堯ト申シケリ、當時余義ナ
キ御一門ナレハ家中ニ出入シテ崇敬セラレ我身モ
又ナキ拳動ナリトカヤ、斯リケル處ニ兼三ノ亘出
来ニケレハ、當家ノ家督ヲ内心ニ挾ミ菟角望ミ思
ハレケル處ニ、兼篤公へ早速仰出サレケルニヨ
リ興醒テ本意ナキ亘ニ思、猶如何ニモシテ兼篤ヲ
失ヒ、吾身家督ヲ申シ賜ラハヤト内々野心ヲ起サ
レケル、是ニ由テ當家ノ若者共ノ器量アル者ヲ近
付昵ヒ親ミ、時ニ隨ヒ酒食ノモテナシ、事ニ觸レテ
銀錢ノ引出物ナトセラレシカハ、物ヲモ辨ヘヌ若
者トモハ是ヲ嬉シキコトニ思ヒ、自然ニ下風ニ靡
キ追従スル者稍多シ、サレハソノ比異様ノ月額シ

テ腕立スル若者ニハ、彼兄弟ヨリ錢一貫充ノ褒美ヲ受シニヨリテ、一貫刺トテ聊爾ノ吏ニ時ノ人申觸ラセシトカヤ、如是若輩ハ漸々懐ケヌレトモ、老ナシキ輩ヲ語フヘキ便モナク、素ヨリ龜忽ニ言出スヘキ吏ナラネハ、免ヤ角ヤト思案ヲメクラシ、先一老ノ前田盛張ヲ内縁ニシテ頼マハヤト婚姻ヲ乞ヒ求ラレケレトモ、盛張同心セス、サラハ先ツ之ヲ退ケスンハ有ヘカラスト、竊カニ兼篤公ニ讒言ヲ構テ、盛張奮功ヲ自負シテ萬ツ我意ナル行ヒ、公ヲモナヒガシロニスルノ行跡多、終ニハ幸侃カニ舞ナルヘシ、速ニ其心得アラレ侍ラハヤナト信實カホニ囁カレケルニソ、其比公義・内義・御身上ノ儀ニツキ仰渡シ、御親戚中ヨリ大小カノ吏トモ仰遣ハサルモ、先盛張ニ承ルコト多カリシカハ、公モ實ト思シ召感ハセ給フ御心付ニケルコソ方見ケレ、是ヨリ後ソノ吏トナク自ラ御隔心ノ色トモ見ヘ、モシ云ヒ沙汰シケレハ、盛張身ニハ覺ナキ吏ナカラ、所詮身退テ遂ニ日月

ノ憐ヲ待ニハシカシト、當職ヲ辞シテ栗ノ脇ト云知行所ヘ篤居シテ二三年ヲ送ケリ、斯リケル處ニ兼秋ノ妻女ナリケルハ河辺郡何某トカヤノ娘ナリシヲ、頃日サル故有テ離別セラレケルニ、彼女恨ミ憤リ瞋恚ノ焰ニ案内サセテヤ、或夜河辺ヨリハル／＼嶮シキ山路ヲタトリ越シ忍ヤカニ松崎和泉守カモトニ来リ、彼人々隠謀ノ次第先ツ玉繁寺ノ坤ヲトシト云所ノ山畔ヘ野火ヲ付ケハ、定テ殿ノ走續セ玉ハンヲ、寺ノ那辺ノ迫ニテ免シテ討奉ルヘシ、誰々ヲハトコノイツクニテ角シテ殺サン、又ソノ比麓近キ石原ト云所ヘ居住スル唐人ニ凶害ヲ致サセヘキナト、此間ノ企始ヨリ終マテ有トアラユル吏トモ一々告知ラセ、其身ハ又夜ヲコメテ歸リ往ニケリ、和泉守巨細ヲ委ク尋聞、サレハコソ此間ノ挙動トモ怪シク心モトナク思シニ、違フヘクモナシト早速盛張ニ密談シ、公ノ御聞ニ入テ猶実否ヲ詮議シテ時日ヲ運ラサス討手ヲ定メ、先ツ悪党ノ張本千本善左衛門・中馬孫兵衛・大迫

藤七兵衛ナト云者共ヲ誅戮シ、其外ノ與黨或ハ誅

シ、或ハ逐電セルモアリトナン、兼秋兄弟ハ御氏

族ナカラ、御内直參ノ人ナレハ後難モ憚リアリ

ト一命ヲ宥助シ、向後家中出入ノ義堅ク禁止タル

ヘキ旨ヲ申渡シ、之ヲ追放セラレケリ、謂ハレナ

キ逆心シテ家督ニ中ヲ違ハレケレハ、サテモ命ハ

有ナカラ今ハ昔ニ引替テ纒ナル身ノ生産ヲ暮シ兼

タル風情トカヤ、

前田休右衛門尉盛張ハ執吏ヲ辞シテ閑居ストイヘ

トモ、官府ノ公用猶盛張カ方ヘ仰渡サル、吏ト

モ多カリケレハ、公モ楚忽ニ執吏御免ノコト如

何ト思召ス、折カラ兼秋ノ謀逆発覚シテ彌御疑モ

散シケレハ、忝モ盛張カ閑居栗脇ニ訪ヒヲハシマ

シテ、此間ノ御ヒカ事トモ悔ヒ謝シ、懇ニ御語ヒ

御自愛ノ乗馬一疋ヲ下シ賜フ、盛張謹テ尊命ノ忝

ヲ拜スルアマリ泪ヲ揮テ、祖父佐渡守盛弘ヘ貴

久公ヨリ拜領ノ兼永ノ御刀ヲ献上ス、即チ本職ニ

還補スヘキノ旨仰付ラル、依テ盛張一紙ノ起請文

ヲ奉ルト云々、

○六三八 前田盛張起請文

起請文

一奉對 兼篤様 竊壽様雖不新儀候、向後無別心可奉助

御奉公事、

一今度加判之儀被 仰付候、於不肖之身ニ不叶申儀候

条、御侘之由雖申上候、重而被仰下候、上意依難黙

止候一節可致御奉公由申上候、就其雖為骨肉同胞、聊

致同意蟲負間敷事、

一就御奉公、或者過言或者不及之儀共、每事可有之候、

是則不可有心底之疎略候、唯若輩不至申上之旨、細々被

加御下知、可被召仕給候、

一先年加判不罷成訴訟之刻、愚意之趣巨細言上之儀共御

座候キ、雖事旧申儀候、少茂無別儀候之旨、猶以申上

候事、

一世上覚悟外之讒言共御座候事候、万一上聞之儀御座候

者、則奉仰 御糺明候事、

右之条、聊於相違之儀有之者、

(釈脱カ)

奉始上梵天帝四大天王 下堅牢地神、惣日本六十餘州

大小神祇、別當國鎮守新田八幡大菩薩 開闢正一位、

取分麗嶋擁護諏方上下大明神 稻荷 祇園 春日 若

宮勸請諸神、別者當處擁護三百餘社大明神并諏方上下

大明神 天滿大自在天神 御部類眷屬等神討冥討可罷

蒙者也、

仍起請如件、

前田久右衛門尉 盛張判

慶長拾年之巳文月廿一日

有川備後守殿 有川休左衛門曾祖父

岩城讚岐守殿 岩城少兵衛曾祖父

充所ノ兩人時ニ申口タリト云、申シクチハ蓋シ

今ノ執次役ナリ、

○六三九 肝付兼篤判物

一今度從 公儀被仰付、壹石ニ付六分八里懸之出銀之

事、來月廿日限に可致皆濟、若其上延引候者、一途之

御嘆有へき由堅被仰渡候条、爰元之人衆各近日可為皆

濟由申渡候、然者遮而皆濟難成候次第候へ、進上申、

八木へ來月十日限に料足をへ同十五日限に可致皆濟

由、各被申由候間、如其令落着候、此上者誰人によら

す何たる訴訟ありと云とも曾以取續れましく候、為後

日墨付如件、

越前守

兼篤御判

霜月廿七日

前田久右衛門尉殿

新納十右衛門尉殿

○六四〇 肝付兼篤書狀

大嶋渡海之船、來月十日を限ニ至山川へ可相廻由、昨日

以一紙、從御老中被仰聞候旨、与中へ申渡、涯分可急申

由御返事申候、其元之御組衆へ右之様子委被仰候而、近

日可為打立可被成談合候、右之はずに無相違様必可相調

由候、巨細為御意得候、恐々謹言、

九月三日

肝付越前守
兼篤(花押)

前田久右衛門尉殿

進候

右二通ノ御書蓋シ慶長十一年ヨリ十三年迄ノ間
ノ事ナリ、而シテ後ノ一通ハ琉球御治伐前年ノ
夏ノ如シ、盛張麗府ノ第宅ニ留守トシテ、公
喜入ヨリ賜フ御書欵、

○慶長十四年己酉、琉球國御征伐ニ依テ、公軍卒

八十余人ヲ從ヘテ、二月廿五日、喜入ヲ発シ指宿
ニ次リ、翌廿六日、山川ニ到ル、諸軍勢三千余、
同日ニ来着ス、今日吉日タルノ間各々乗船ス、

御供

新納十右衛門尉久信 執豆 志々目源左衛門尉

前田左近將監 比地黒八右衛門尉

中野助七 吉牟田新左衛門尉

志々目五郎右衛門尉 伊達斛兵衛尉

白尾玄蕃允

有馬藤右衛門尉

坂本善兵衛尉 以下闕

同廿八日、家久公山川ニ着御新納久信日記ニ推新
公モ着御ノ由ヲ載スト

云ヘトモ、公微恙ニヨツテ出仕シ給ハス、使者ヲ
不然而由、

以此旨ヲ言上セラル、家久公ヨリ伊地知平右衛
門尉ヲ御使ニテ、今般渡海ノ労苦ヲ謝シ命セラ
ル、重テ別府舍人助ヲ以テ 公後陣ノ大將トシテ
大嶋ノ壓タルヘキノ旨 仰出サル、

三月三日、諸軍士號令ニ任セテ各々平田氏へ相聚
リ、御三殿ノ御判形法制ノ條書ヲ仰渡サル、同日
ノ夜半、順風ニ任セ兵船四十余艘一同ニ纜ヲ解テ
出船、翌四日ノ晩、永良部嶋ニ着ス、此間行程四
十八里ト云々、公ノ舟ハ十一端帆、供舟二艘内九
端帆一ツ五枚帆一ツナリ、翌五日、順風無キニ依
テ滞在、

同六日、永良部ヲ出船、全七日ノ酉刻ハカリニ大
嶋深江ノ浦ニ着、其間百十余里許、天水カ渡トテ
古ヨリ難義ノ渡ナリト云傳シカトモ、安ミト渡海

セシ条諸天三宝ノ加護無疑ト、各頼母數ソ思ヒケルトナン、

同八日、カサント云所へ敵少ミ拵居ルノ由聞ヘシカハ、早朝ヨリ諸軍勢打出テ相向フノ處ニ彼者トモ恐レ周章テ悉ク山林へ逃隠ル、ヤウ／＼ニシテ耆老共ヲ呼出シ皆々安堵スヘキノ旨申聞ラル、依テ又元ノ湊へ帰ル、其間行程六里ナリ、

十二日、深江ヨリ同嶋大和濱へ到ル、其間八里、十六日、大和濱ヨリ西ノコミト云湊ニ到ル、又八里ナリ、

十七日、西ノコミヲ出船、風波悪キニヨリテ諸船又元ノ湊ニ漕戻ス、公ノ船及ヒ白坂式部少輔ノ船唯二艘徳ノ嶋ノ内カナグマニ着ス、此間十八里、從者ノ舟ハ同嶋ノ内ワイナニ着ス、共ニ着スル舟七艘ナリ、爰ニテ敵一千ハカリカケ来リ、通夜舟ノ辺ヲ囲居ルノ際、翌十八日、各船ヨリ下リテ鉄炮ヲ放チカクレハ、暫モ支ヘス崩レ行ヲ追打ニ首五十八カリ討取ケリ、内當手ノ士前田左近將

監・伊達斜兵衛尉・白尾玄蕃允・有馬藤右衛門尉・坂本善兵衛尉各分捕シテ五人ヲ得タリト云々、同廿日、同嶋ノ内アキ徳ニ到ルカナクマヨリ五里、始味方ノ舟二三艘此所ニ着ケルニ、敵寄セ来リシヲ爰カシコニ追詰、二三十人討取シト云々、

同廿一日、アキトクヲ出、海路七八里カ程行ケルニ、俄ニ風悪クナリシカハ、辛シテ漕戻シ又元ノ泊ノ隣カメソウト云所へ着ス、

アキトクニテ柁山氏ヲ始兵船二十艘渡海、同湊ニ入、當手ノ小舟モコ、ニテ追付奉ル、都合舟數七十余ト云々、

同廿四日、早朝カメソウヲ出船、暮ニ及テ永良部ノ嶋崎ニ着ス沖ノ永良部ト号此、斯頃アツテ又出船シ、明廿五日ノ夜ニカケテ琉球ウンテンノ湊ニ着船ス海路三十五里ト云々、此ニハ敵今帰仁ト云所ニ城ヲ構ルノ由聞ヘシカトモ未タ向ハサル以前ニ逃落ス、同廿六日ノ朝、味方ノ舟トモ二三艘輕ヒトコシラヘ湊ヲ漕出ノ間、公何夏カアルラント小舟ヲ出

シテ之ヲ見セシメラルノ処ニ、折フシ異キ舟一艘見□ケレハ漕寄テ問ニ、琉球ノ使者舟也ト答フ、依テコレヲ引テ来リ、支ノ由ヲ 公ニ申ス、即チ樺山氏ニ達セラレシカハ、市来備後守・村尾入道ヲシテ執次シム、意趣ハタ、合戦ヲ止メラルヘシ、進退ハ宣ク乞ニ随フヘシトノ義タリト云々、使者一人ハ僧、一人ハ名護ノ親方トテ三司官ノ其一也トカヤ、又ヲサセノソハト云官人以上三人也ト云々、然ル処ニ又一艘到来ス、是モ全ク使者舟也、最前ノ使無心元トテ重テ遣サルト云々、相聞フ、凡琉球ヨリ和平ヲ乞ノ使ヲ遣ス支三度、大嶋迄ト志シツカハサレシ使僧ハ爰彼ニカクレ居テ終ニ出合ス、二度目メノ使僧後ニ来リシ舟也、第三度ノ使名護ナリ、因茲最前ノ兩使勘気ヲ蒙ルト云々、

カクテ使者ヲノミ瓶酒ヲト、ノへ、公ノ舟へ乗ラレシカハ、御對面アリケリ、頓テ奏者来テ市来備州ノ方へ行向フ、

全廿九日、大湾ニ到ルウシテンヨリ二十五里、昨夜半ウシテンヲ出船ト云々、四月朔日、諸軍勢舟ヨリ下テ陸路ヨリ首里ニ向テ相働、其間五里ノ道スカラ火ヲ放テ焼詰ケル際、煙十方ニ充滿テ東西ヲモ見ヘ分カス、然レハ和平ノ儀相違カト敵覚束ナキ懸ニテ、若武者共少ト出合防戦ニ及ノ間、忽チ敵二人討取レス、内一人ハ當家ノ士伊達斛兵衛尉分捕致スノ処ニ、和平ニ成ツルヲ狼籍然ルヘカラスト下知アルノ間、頸ハ密カニ叢ニ捨テケルト云々、

前日、運天ニ到リ和ヲ乞ノ間、其旨ヲ違ヘシトテ具志頭王子國王ノ弟也ノ大ワシノ澳マテ出向フト云ヘトモ、既ニ陸地ヨリ各發向ノ間空シク立帰ラルトカヤ、ソノ後和平イヨク事成シカハ諸軍勢共ニ久米村那覇ノ際ニ打入ケリ、具志頭王子及浦添親方王ノ叔父・謝納親方質トナツテ出、

全四日、國王城ヲ出テ麓へ降ル、

五日、諸軍勢麓へ差寄、大將ヲ始各從者一人充ニテ城中ニ入、諸軍卒麓ニ相備フ、斯テ番衆ヲ城中

ニ入護ラシメ、各陣所ニ返りに、
五月六日、名護親方ヨリ使者ヲ以線香數品ヲ送ラ
ル、是ハウンテンニ於テ御對面アルニ依テ也、
翌日、公モ亦使ヲ差シテ鶯舌十袋ヲ贈リ玉フ、
琉球国残ナク平定ノ旨注進アリシカハ、御国ヨリ
御使來着シテ、諸軍士ヘ酒ヲ拜領ス、依テ桃山氏
ノ陣所ニ到リ各參会アルノ処ニ、公御病惱ニ付
テ赴キ玉フコトアタハス、故ニ一樽ヲ贈リ遣ハサ
ル、御頂戴アツテ從軍下々ニ至ルマテ残ラス之ヲ
拜飲セシムト云々、サテ國王モ薩州ヘ渡海アルヘ
シトノ義ニテ、諸軍艦シテ順風ヲ相待ト雖、打續
キ日和悪シク、徒ニ數日ヲ経、
五月十四日、國王及諸軍勢那覇ノ湊ヲ出船シ、
同十五日、ウンテンニ着、
十七日、運天ヲ出テ天水カ渡ヲ渡、
十九日、七嶋ノ内諏訪ノ瀬ニ到リ、
廿一日ノ夜半、諏訪ノ瀬ヲ出、
廿二日、終日通夜征帆風ニ任、

廿三日黎明、山川ニ着船ス、今夜風雨悪シク諸船
或ハ風ニ放レ、或ハ汐ニ引レテ破損セシ舟モ多カ
リキ、

廿三日ノ夜、兩大將及ヒ琉王ノ船恙ナク着岸、
廿四日、諸軍勢互ニ相賀シテ、公山川ヨリ直ニ
喜入ニ帰着シ玉フ、此砌ヨリ御病惱催シケル故、
竟ニ魔府ヘ御出仕モナカリキトニヤ、

○六四一 肝付兼篤書状

公大嶋ヨリ前田佐渡守盛張ヘ賜フ御書

將又羈壽狩などへむさとのほらるへき事無用たるへ
し、しかくの功者を供にのほらるへき時者、仰付候
て肝要たるへし、何かときまかせニ候する刻者、涯
分無用捨指南申さるへく候、縦無承引腹立候とも、
節々其心得專一ニ候、相構々々念を入られへく候、
其由奥へも委曲申さるへく候、次上名・下名之役人
別而農作ニ念を入、早晚よりも手廣いたし候やうに
申付らるへく候、又こゝもと鉄難得候由候まゝ、役

人衆へ申付られ、ふかせ置れ候て便船之時者、少なりとも御才覚送遣されへく候、又新茶出来時分ニ成候間、自然便船之時者、少なりとも送遣されへき由、肥前介殿へ可被仰候、又玉繁寺・浄（法カ）寺へ別紙にて雖可令申候、急便のまゝ無其儀候、海路心安こゝもとへ罷着候条、目出候、節々我等在所へ御出候ハ、羈壽へ御指南なされ給へき由可被申候く、又先日巨細申候ごとく同所作之かんきん頼申候由、浄法寺へ可被仰候、又かこしまへの状ニ、たしかに持せ上らるへく候、

先日者山川へ被成下着候、其刻出船取紛不能閑談候事残多候、仍海上無為ニ去七日大嶋へ着船候、扱者此嶋之番手たるへき由、山川にて被仰付候間、無余儀御返事申上候き、雖然此嶋ニハ御番入間敷之御談合候て、琉球渡海之儀定ニ候まゝ、満足ニ候々、又其元之儀内外ともに可然様に才覚肝要ニ候、就中衆中いづれもきまかせに候ハぬやうニ可被仰付候、可春老并本田新介殿別而可被成御入魂給由申入候まゝ、自然公儀ニ出合之事共候者、

巨細被得御意へく候、又當年之駒月毛取せられ候へより、河上五次右衛門尉殿へ頼申、早道に入候様に申されへく候、中間なと堅固ニ又はミなと無不足様に可被仰調候、又鹿毛駿之駒ハ、其元にて乗入させらるへく候、右二疋より外ハいづれもかけ馬ニなされへく候、又羈壽之馬小栗毛、只徒ニ立置候ても不入事ニ候まゝ、かこしまにても、誰人之御息たちにも羈壽前より進候て、可然候はんする御方へ進せられ候て肝要たるへく候、又急ほし野月毛馬・喜入野鹿毛いづれも徒ニのミ居候てハ、不用ニ成へき間、しけくのせらるへし、又貴所何方へも所用之刻者、無遠慮可被乗候、委細為御心得候、兼又同名甚左衛門尉殿之事、先日巨細申置候様に、少も無失念、兼而本田源右衛門尉殿へ能ニ届置れへく候、さやうニ候て又ミ喜入ニ越られ候ハ、其嘸なさるへく候、乍重言申遣候、由断有ましく候、又安小左方へ被成談合、新敷つくれ御座之天しやうを、なつてあませられ、竹にてふちをさせらるへし、竹於無之者木ふちたるへく候、又奥へ行通り候かげやの間をぬり屏ニさせられ、

屏中門をたてさせ、いかにも能つまり候様に有へく候、
其外普請等無由断可被仰付候、必來六月者可為歸朝候由
候まゝ、其内に皆悉可被相閉目候、猶期來信、恐々謹
言、

三月十二日

肝付越前守

兼篤(花押)

前田佐渡守殿

御宿所

○六四二 穎娃久政外二名連署書狀

穎娃久政・平田宗信・伊勢貞朝ヨリ盛張へノ再報

猶々、五枚帆へかこ乗置申候間、從其方かこ置參候
者、最前水手者おろし可申候間、為心得候、以上、

猶御報令披見候、然者立置水手任之儀承候、爰元も跡船
罷渡ニ付、老人茂不參候てハ難調候間、早々被仰付可被
指遣候、殊ニ老所持之儀候間、連々かこ役等無御勤候、
今度者無吳儀被仰付尤存候、恐々謹言、

三月九日

伊勢大内記

貞朝判

前田佐渡守殿

平田安房介
宗信判
穎娃長左衛門尉
久政判

右ノ三老蓋シ琉球陣兵船渡楫ノ支ヲ掌リ山川ニ在
津セルナラシ、考ルニ新納久信日記ニ 公ノ供舟
五枚帆三月四日同時ニ出船スルコト不能ト云々、
此文章跡舟罷渡ニ付テト云、且ツ五枚帆等ノ支有
三月九日ノ日付旁此陣中ノ狀トスヘキカ如シ、

○六四三 比志嶋国貞書狀

比志嶋紀州ヨリ盛張へ賜フ狀

急度令啓候、仍今度奥州様就御上洛、從諸浦船かこ出可
申候、然者越前守殿御領分より浦濱之儀よく存たる人、
早々此方へ參上候て、御談合之様承合尤候、以之外御い
そきたるへく候間、不可有油断候、恐々謹言、

四月十七日

比志嶋紀伊守
國貞判

前田佐渡守殿

御宿所

右比志嶋紀州狀モ亦今茲ノ儀ナリ、新納久信日記
ニ、奥州様御上洛ニ付テ、公ノ船頭婦朝等ノ
亶アリ、

紀州執政當職ノ國卿ナリ、而シテ陪臣贈答ノ書通
當時一所衆ノ禮待見ツヘシ、

○慶長十四年己酉六月廿九日、公卒、享年四十八、

御法號傑心大英居士、鷄頭山ノ中溪ノ東ニ葬リ奉、

加塩休五殉死、

後ニ利翁寺ヲ改テ傑心禪寺トナシ御位牌ヲ安置

ス、利翁益公ノ御牌ヲ玉繁寺ニ移シ奉ル、

慶長四年ヨリ今十四年マテ御家督十一年、

家宰

隈本淡路守宗清

前田久右衛門尉盛張

淡路守

新納十右衛門尉久信

十右衛尉

佐渡守久右衛門尉再任

七代

兼武公

鶴壽丸 長三郎 彈正少弼

○慶長六年辛丑御誕生、御母ハ岩切三河守善信入道

可春女、月窓心鏡大姉、

慶長十四年己酉、御父兼篤公御他界、則御家督時

ニ纒ニ九歳ナリ、

○是歳、太守家久君ノ御前ニ於テ元服、長三郎兼

武ト称ス、御刀祐一腰拜領、

傳云、公元服シテ鷹府ヨリ直ニ加治木・国分

へ御参上アツテ御礼ヲ申サセ玉フ、前田佐渡守

盛張コレヲ補佐ス、依テ盛張モ亦 竜伯君・惟

新君へ謁シ奉ルト云々、

○慶長十九年甲寅、河邊宮名ノ内ノ知行ヲ轉シテ、
日州真幸院吉田ノ内正明寺并津留村ノ内ニ賜フ、
仍テ御家人數十人吉田ニ移居シム、

○六四四 川上久好・顯娃久政連署知行目錄

知行目錄

高四千百九拾壹石貳斗

右之割付

千六百拾壹石七斗壹升八合

千七百七拾七石三斗三升九合

四百三拾石壹斗一升四合九才

三百七拾貳石貳升九合

合四千百九拾壹石貳斗

右本目錄者、後日可被指出者也、

慶長十九年七月廿七日

顯娃長左衛門尉

久政印

川上式部太輔

久好印

肝付長三郎殿

参人々

考ルニ、文禄四年、本田三清・伊集院幸侃判形

ノ御知行目錄喜入惣高三千六百廿五石七斗五升

二合、清水惣高八百五十六石八斗六升七合、宮

名ノ内高五百六十四石七斗八升一合、都合五千

四十七斛四斗也、内清水惣高 兼篤公ノ御時ヨ

リ知行シ給ハス、残テ高四千百九十九石五斗三升

三合ナリ、内千六百一十一石七斗一升八合喜入下

村、千七百七十七石三斗三升九合同上村、合三

千三百八十九石五升七合、新檢地喜入惣高也、

文禄ノ惣高ニ相減スル分二百三十六石六斗九升

五合、此不足并ニ宮名ノ内五百六十四石七斗八

升一合相加合八百一石四斗七升六合也、今正明

寺惣高四百三十石一斗一升四合九撮、津留村ノ

内高三百七十貳石二升九合、合八百二石一斗四

升三合九才ナリ、喜入新竿不足并宮名ノ高二引

合六斗六升七合九才過スルカ、

○同年ノ冬、大坂ノ御陣 公喜入ノ士卒百余人ヲ從

ヘテ進発シ給フ、新納参河守久信補佐シ奉ル、肥

後ノ國ニ到ルノトキ、関東・大坂講和無吏ニ及ノ由相聞フルニヨリ、諸軍勢トトモニ帰陣シ給フト云云、

○元和二年丙辰十一月、若宮大明神ヲ天神宮ノ社頭ノ傍ヲニ御勸請、権大僧都明照竹下氏・二見但馬入道成也命ヲ奉テ、隅州溝辺へ参向、神輿ヲ守リ奉、今月十九日到着、同廿二日假殿ヲシツライ迂シ奉ル、

○全五年己未三月、若宮ノ御社造營、五月二日遷宮、

○六四五 明照覚書

明照記云、

若宮殿

右當社者、爲伴氏之棟梁有由緒奉祝、号 若宮殿、兼武公之御先祖大隅國始羅郡之内加治木郷溝辺村爲御知行、兼武公之曾祖父 兼演公之御時、天文年中、調御社於溝辺鷹大明神之脇、被奉

崇畢、三州之太守義久公之御時、薩・隅・日州之大名・小名各在所移有之、幸侃三男兼三公之時、

文祿四乙未冬十月廿六日、至當所喜入郡移給、雖

然、若宮殿者不移給御座キ、其已後依幸侃之咎兼三喜入爲不知行、即 越前守兼篤公被成御安堵畢、其御子兼武公之御時、至當所可被奉移由被仰出、爲御使権大僧都法印明照并二見但馬入道成也以同道、元和二年丙辰冬十一月十三日、在所罷立、同十五日、溝邊参着、十六日、十七日、深雪難凌故鷹大明神之大宮司中原之在所滞留、同十八日、奉供奉加治木着、翌日十九、御乗船不日當濱着岸、及黄昏天神之社頭御輿居、同廿二日、拵草葺之假殿被移之、導師浄法寺阿闍梨見重法印、次有御神樂矣、

元和己未年春三月十二日、御社造營相始至十余日成就畢、同夏五月二日遷宮、相調導師右同、自假殿 御神躰者明照奉守、兩師子阿呼面者大明神之檢校守之畢、爲後日覚所書付如此、穴賢々々、

元和五己未年仲夏吉日

社務權大僧都法印明照敬白

凡若宮ノ御祭年中三度二月十五日、八月十五日、十一月十五日ナリ其外

九月十五日、僧衆ヲ供養シ、法花一部ヲ讀誦セ

シムルコトハ、國兼公号尊臺俊可居士文明十三

年辛丑八月十五日ヲ以帖佐ノ惣善寺ニ於テ御他

界、故ニ溝辺時代ニ於テハ八月十五日ヲ以讀經

祭祀ノ禮執行ハル、ト云ヘトモ、加治木御移ノ

時ニ及テ、八月十五日加治木中大ニ八幡ノ祭祀

ヲ執行ノ間、延引有テ九月十五日ヲ用ラル、爾

シヨリ今ニ到テ其例ニ随フト云々、

○六四六 島津久元外四名連署知行目錄

元和六年庚申、御分國中檢地相改御知行目錄

知行目錄

薩州喜入之郡之内

高千七百八拾三石一斗三升三合

上村

高四百四拾老石七斗五升三合

下村

高四百三拾(石脱カ)一斗一升四合

日州諸縣郡之内
正明寺村

合貳千六百五拾五斛

右知行、今度御分國中相改配分候、全可有領地者也、

元和六年卯月二日

伊勢兵部少輔

貞昌判

三原諸右衛門尉

重種判

町田圖書頭

久幸

喜入摂津守

忠政判

下野守

久元

肝付長三郎殿

去ル慶長十九年ヨリ以来、數年ノ内ニ御知行過

分ニ減少スルコト、傳云、頃日 太守ヨリ諸

士ノ知行其分限ニ應シテ、四分一充借リ玉フト

ノ度ニテ、高千五十石ヲ差上ラル、又元和四年

戊午ノ歲、出銀未進ニ付、高五百五十石ヲ上納

セラルト云々、

考ルニ、去ル慶長十九年ノ目錄高四千百九十一石二斗ナリ、内右二口合千六百石相除キ残テ高二千五百九十一石二斗ノツモリナリ、而シテ今二千六百五十五石ナリ、過スル分六十三石八斗ナリ、不知、古老ノ記スルモノ差フ所アルカ、不然ハ六十石余ノ相増モノ何カ故ソヤ、追テ可尋之、

○元和八年壬戌九月廿三日、太守黄門君并ニ中丸・

姫君 公ノ築出ノ館ニ渡御宅麩府城東門ノ邊ニアリ、頃年郡主城主在所ノ住居ニ許サレス、故ニ、公モ亦在府ス、先三献ヲ進ム、

御座ノ次第

黄門君 中丸

姫君 兼武公

次ニ拜領物

御樽 一荷

干鯛 一折

青銅 三千疋

以上 兼武公江

御衣 一重

御裏衣 二

以上 室家江

右頂戴終テ、進上物

御太刀 一腰

鵜目 千疋

右 太守江

鳥目 千疋

右 中丸江

同 千疋

右 姫君江 (マ)

御膳ノ時御座ノ次第

太守上座床ノ脇 中丸主居ノ上

姫君客位ノ上 伊勢兵部少輔ノ室同二番

兵部少輔 同三番

兼武公 同四番

室家 主位二番

ヲイマ御供ノ女房 同三番

以上八人

晩頭小御臺ノ時、

御三人御座如前、

兵部少輔室 全前

兵部少 全前

理心 全四番

室家 主位二番

ライマ 全三

ヲキヤク 全四

渋谷防州室 全五

以上十人

早朝ヨリ終日ノ御座ニテ、祖父霜臺奉公ノ忠勤淺

カラサルノ旨、重疊 御感アツテ御腰物 大和物代金一
枚五兩拵在

御拜領ナリ、其後彈正少弼ニ召成サレ、御祝トシ

テ御脇指新身ナカラ大キレモノニ候マ、ツカハ

サルトノ 御意ニテ、御拜領タメシ希ナル御衷

共、外間実義誠ニ冥加浅カラサリシ次第ナリ、

御太刀 一腰

御馬代三百疋 一匹

右官途ノ御禮トシテ進上、サテ御座席ノ景氣ナト

面白シトノ 御感ニテ、和漢ノ御詠并ニ誹諧トモ

アソハサレ、舞楽・御酒宴時ヲ移シテ深更ニ及テ

還御ナラセ給フ、

御供ノ人衆

伊勢兵部少輔

三原飛驒守

國分左京亮

四本金右衛門尉

日高次郎右衛門尉

理心

御供ノ女房四十人

御小者・御中間合十貳人

御輿舁・御雜掌持合十六人

御見廻ノ人衆

町田駿河守

東郷肥前守

三原七左衛門尉

山田彌九郎

押河江兵衛尉

同息

澁谷伴松

本田甲斐守

本田甲州

渋谷周防介

岩切雅樂助

同廿六日、歴々廿餘人、

國分十右衛門尉御座并ニ御膳等ノ奉行ナリト云々

同廿七日、歴々廿余人、

翌日早朝、御礼トシテ 公登 城、其後室家登

同廿八日、御用聞町人、

城ノ時、深折一・御樽一荷 東丸ニ進上、且酒肴

同廿九日、歴々十人、

ヲ 中丸ニ進セラル、

同廿四日、饗應ノ人衆

寛永二年乙丑八月十九日、公卒、御年二十五、

喜入攝津守

町田圖書頭

御法名自性了源居士、鶏頭山玉繁寺ノ内ニ葬リ奉

山田民部少輔

佐多越後守

ル、

顯娃長左衛門尉

八木民部左衛門尉

慶長十四年己酉ヨリ今年マテ御家督十七年、

本田甲州

岩切雅樂助

同廿五日、饗應ノ人衆

○六四七 伊勢貞昌書状

豊州

佐多伯耆守

一書令申候、然者為御餞 鳥目五百疋被懸御意候、何方

川上上野介

根占七郎

より預候も致斟酌返進申候へ共、被思召寄御懇志之儀候

伊勢美濃守

敷根中務少輔

条、先々預置候、別而忝存候、何も懸御目御礼可申述

北條土佐守

高崎大炊助

候、恐惶謹言、

本田内膳正

相良丹後守

十月廿四日

貞昌判

本田甚兵衛尉

岩切雅樂助

伊勢兵部少輔

肝付彈正様

人々御中

家宰

佐渡守

参河守始十右衛門

松崎和泉守兼立

安樂播磨守兼保

○六四九 松崎兼立・安樂兼保連署假坪付
假坪付

高拾貳石者

右、小平殿へ被下之事、於向後少も別儀有間敷候、

御判を追付申請渡可申事、違儀有ましく候、為後月如

此、

元和八

十月四日

安樂幡厂守判

松崎和泉守判

○六四八 肝付兼武書下

今度之出合ニ付、一身生殺たるへき由被仰出候、迷惑千

万なから不及力、上意之趣申渡候、小平事無別儀可取

立之条、可心安候、仍一紙如此、

元和八年十月三日

肝付彈正少弼

兼武御判

前田奉膳兵衛殿

前田奉膳兵衛尉殿前田小太郎祖

まいる

此二通 兼武公御譜之内ニ

以後見合書入管也

次渡物 新六

右二通文書ノ内ニ相傳ルトイエトモ、兼武公御譜中ニ

見得ス、故ニ右ノ子細相分ラス、尤古老ノ口碑トテモサ

タカナラス、然レトモ右ノ御文書ニテ奉膳兵衛格別ノ忠

義御感賞アソバサレシコトハ疑フ処ナケレハ、往昔ノ記

録方澤新六俊宝永六己丑六月朔日ヨリ享保六辛丑九月廿二日迄在職傳置タル旨ニマカ

セ、今般猶又吟味ノ上、當 公ニ申上書載スル所ナリ、

嘉永三年庚戌七月廿八日

家宰

前田宗左衛門盛敬

佐藤運左衛門實品

安樂八左衛門兼通

新納十右衛門實記

寄役

白濱太郎八貫賢

(表紙)

桃外院殿年譜雜傳

乾

自寛永二乙丑
至明曆三丁酉

桃外院殿年譜雜傳

乾

分祖八代
兼屋公

元和五年己未十一月十四日御誕生、彈正少弼兼武
公長男、御母澁谷四郎左衛門尉重將女也、

寛永二乙丑

八月十九日、御父兼武公卒シ給フ、時ニ 公僅ニ
七歳、即遺跡ヲ相續シテ御家督タリ、安樂伊豆兼
保・松崎和泉兼立補佐シ奉ル、

三年丙寅

九月六日、 太守家久君權中納言ニ任シ給フ、時
ニ 兩大樹ニ從テ御在京、

十一月廿二日、 公ノ御母堂卒給フ、給黎ノ鶏頭
山玉繁禪寺ニ葬ル、御法名月鏡桂生大姉、

四年丁卯

八月廿七日、 太守家久君ノ御前ニ於テ元服、三
郎四郎兼屋ト稱セラル、御刀一腰安房御拜領ナリ、
時ニ九歳ニナラセ給フ、

五年戊辰

六年己巳

閏二月二日、 太守家久君加治木腹ノ御姫君御縁
組ノ義、外祖父澁谷四郎左衛門尉へ 高命ヲ蒙ラ
ル、仁禮藏人某コレヲ傳ヘラル、

全四日、御請ヲ申サシメ給フ、時ニ 公十一歳、
七年庚午

十二月、 世子又三郎忠元君薩摩守ニ任セラレ、
從五位下ニ叙シ給フ、

八年辛未

四月朔日、 忠元君 公方家光ノ御前ニ於テ、松
平氏及御諱ノ字ヲ賜テ、松平薩摩守光久ト更メ、
且侍從ニ任セラレ、從四位下ニ轉シ給フ、

九年壬申

四月朔日、 綱久君御誕生、

十年癸酉

十一甲戌

十二乙亥

二月十一日、袈裟龜公同母ノ御妹姫早世シ給フ、御法名
春窻心芳大姉、鶏頭山ニ葬、御位牌ヲ瑞泉山心慶

寺ニ建ラル、

十三丙子

太守家久君御不豫、十一月、典藥久志本式部下向、故ニ諸士ヲシテコレヲ勞ラハシメ給フ、兼屋モ亦彼旅館ヲ訪ヒ、太刀銀馬代ヲ贈リ遣ハサル、翌年閏三月、帰洛ト云云、

十四丁丑

三月、加治木ノ御姫早世、

閏三月朔日、公加治木ニ往セ給フ、姫君ノ喪ヲ吊ヒ、且中陰ノ御法夏ニ依テナリ、御香奠青銅一万疋ヲ進ラル、松崎和泉御使タリ、執奏川上助左衛門、

空二日、公加治木ヨリ御帰帆、

是ヨリ先 公加治木ニ往テ幣ヲ納レ給フト云ヘリ、實ニ其年月ヲ記サス、

今年、太守君ノ御病痾ニ依テ、醫師更ル々下向ト云云、

十月、肥後ノ國天草ノ郡ニ南蛮鬼利支丹ノ徒党蜂

起シテ一揆ヲ企、近境ヲ侵シ靡ケ、既ニ肥前ノ嶋原ニヲシ渡リ、城ヲ攻取リ、天草四郎ト云者ヲ大

將ニ執立、箆城スルノ由風聞夥シ、

十一月廿二日、上使新庄右近麿嶋ニ下向、

太守ノ疾ヲ慰問セラルト云ヘリ、

十五戊寅

正月九日、公軍卒九十餘人ヲ從ヘテ麿府ヲ發シ、肥前ノ國嶋原ノ陣ニ赴キ給フ、

御備

一長柄十本 一鉄炮十挺

一弓十張 一御旌一流

一御持弓 一御持筒

一御手鍔 一御馬

御供

九郎兵衛兼兵 (組頭十九人)

安樂伊豆兼保 執事

松崎長兵衛 (組頭十八人 後号仲左衛門)

志々目源左衛門義里(組頭六人)与

新納十右衛門久明 既司

志々目正右衛門義眞普請奉行

隈本佐太右衛門(御兵具司後号諸左衛門)

安樂主馬兼昌 同前

中野堅右衛門(全前後助右衛門)

安樂縫殿兼時(兼保男後才右衛門)

新納慶右衛門久重 後号十左衛門

志々目少左衛門義重義里嫡

前田佳右衛門盛子(賄方後十郎左衛門)

日高次右衛門爲春(賄方後權右衛門)

安樂貞左衛門 主馬弟

前田関右衛門 後号善兵衛

松崎爲右衛門 後藤左衛門

吉牟田種右衛門

二見但馬

緒方主殿(賄方後号休右衛門)

志々目新右衛門

山口軍介 後二郎右衛門

志々目鏡乘坊 義里二男

岩城少右衛門

丸岡大右衛門

徳永六彌左衛門 後慶左衛門

中野治右衛門

有馬孝兵衛

有馬正左衛門

石尾彌右衛門

松本助左衛門

岩田山右衛門

加塩茂兵衛

春田新介 後小左衛門

勝田正左衛門 後主水左衛門

中村與七兵衛 後清右衛門

牧之瀬角左衛門 後相右衛門

中村休兵衛

伊牟田傳左衛門

丸山志摩允

山口彦兵衛

後源右衛門

下村軍右衛門

勝目虎介

後安右衛門

坂口彦左衛門

松田清太左衛門

後彦右衛門

濱嶋南右衛門

後惣左衛門

矢崎了右衛門

池嶋權介

古江助右衛門

黒岩傳内

澤惣右衛門

以下眞幸御
家人共七人
後源右衛門

馬場與右衛門

大山孫右衛門

新保作右衛門

安樂七兵衛

中嶋五右衛門

以上廿人

城門ノ勘右衛門

眞幸夫一人

以上五十七人

中間

相左衛門

次郎介

甚右衛門

太郎兵衛

八兵衛後号川野
八左衛門

仲右衛門

五郎兵衛

宅右衛門

甚兵衛

以上九人

小者

兵七後号二見平右衛門

雜色

喜右衛門

人足

淵田ノ与喜右衛門

鎮守園ノ助左衛門

今村ノ二郎作

下堀内孫兵衛

前濱ノ助八

上堀内ノ孫介

上堀内ノ助次

平原ノ助七

下屋敷ノ六右衛門

長野ノ甚吉

下園ノ十左衛門

松窪ノ早左衛門

今別府ノ八兵衛

樋高ノ助左衛門

濱田ノ仁介

内木場ノ孫市

川原ノ六郎五

藪ノ彌左衛門

幾介船

五枚帆一艘 船頭休左衛門

水主善八 宗二郎

兵太 五郎作

善左衛門

以上六人

惣合九拾四人

今日、山崎ノ内朽木田へ着御行程九里、

同十日、紫尾山へ御止宿行程四里、今日日和悪キニ依テ也、

同十一日、出水ノ六月田へ着御行程九里、

同十二日ヨリ十五日マテ此處御滞在、御舟コレ無ニ依テ也、

同十六日、米ノ津ヨリ御出船、加世田丸九端帆、

船頭角右衛門、今日、長嶋ノ内宮ノ浦ミノト云所エ御泊、

同十七日、天草ノ内久玉エ着船海路八里、供船五枚

帆幾介船ト号ス、安樂縫殿助主取ニテ、賄方緒方主殿等、

今日同久玉へ着ス、

同十八日、久玉エ襄リ玉ヒ、御陣屋ヲ構フ、

同廿一日、天草ノ内下高根ニ到着、久玉ヨリ行程六里、

同廿二日、鬼利支丹ノ賊ヲ山中ニ狩シメ給フ、依テ我軍卒三十人山ニ登ル、

今日、高根ヨリ亀ノ河ト云處へ御渡海行程六里、

同廿五日、狩ノ人衆亀ノ河エ到着、其後上津浦エ御陣ヲ徙サル、

二月十四日、世子薩摩守光久君有馬ニ着御、関

東ヨリ御追伐ノ御使松平伊豆守信綱ニ謁シ御帰國、十六日ニ魔府エ着御ト云へリ、是 太守ノ御

惱重ラセ給フノ由、公方家ノ台間ニ及ヒ、看病

ノ御暇ヲ遣サレ、且ハ伊豆守ニ力ヲ合セ、有馬ノ賊ヲ治伐セラルヘキノ旨、去ル正月十三日、台

命ヲ含ンテ、即日江戸ヲ發シ玉ヒキト云々、

同月廿三日、太守從三位權中納言兼大隅守源家

久君逝シ玉フ、御歳六十三、御法號花心名琴月大

居士慈眼院殿、

全月廿八日、島原ノ城陥ル、首ヲ梟ルコト四方餘ト云々、

三月、諸軍勢帰陣、十七日、公鷹府ニ到リ御帰着、

今日、光久君鷹嶋御發駕、江戸ニ赴給フ、

五月八日、江府土井大炊頭利勝ノ亭ニ於テ、光

久君御襲封ノ台命ヲ蒙ラセ給ヒ、同十三日、御

登城、拜禮ヲ遂行ハルト云ヘリ、

今年、兼屋公、平田藤右衛門某ノ女ヲ迎テ室ト

シ給フト云ヘトモ 幾程ナクシテ去リ給フ、

十六年己卯

二月、御分國鬼利支丹宗門ヲ按察シテ人別ニ手札

ヲ分賜フ、

右ニ就テ、御家老中連印ノ御下知条々并ニ竹木

以下ノ事ヲ下知セラル、

○六五〇 川上久国外三名連署引付

覚

一 先年札取候もの前々帳ニ引合、今度沙汰可被仕事、付方々移替之者共可被相究事、

一 先年札出之時分、或在江戸・在京・或琉球下他國など

へ行遣札不取者於有之者、細々糺付、今度札可被出

事、

一 貴理師且宗之儀者不及申、不審成者ハ別紙ニ付留札被

遣問敷候、若新敷きりしたん宗ニ糺付候者、早々鷹嶋

へ可被申上事、

一 自今以後御國之者札不持候ハ、其所ニ而曾召置まし

き事、

一 貴理師且見及聞及鷹嶋へ可致言上事、付前ニころひき

りしたん共之内、于今不審成躰見聞候ハ、所之地頭・

噯衆・庄屋へ早々可申出事、

一 或札不取者、或他國人、其外不審成者五人与ニ入置候

ハ、其所之者共へ罪科可被仰付事、

一 先年札被下候以後生来之者、今度札可被出事、

一 手札失ひ候者ニハ科錢五百文相懸、新敷札を可被出

事、

一他國之者其前ニ居付度之由申候共、鷹嶋へ不得御意、

自今以後曾召置間敷事、

一其所ニ旅人參候時者、即刻嚶衆申出、帳ニ付留、かこ

しまへ可致披露事、付旅人居付候ハ、懸り合之者之

書物可被取置事、

一死人之札可被召上事、付牛馬之死札可為同前事、

一改衆野藁薪秣并其所中之送迎者、可為所役事、付從其

所之衆中高三拾石より下之付衆之賄者、八合出米之内

を以可被相調事、

右條ニ入念可有其沙汰者也、

寛永十六年二月廿五日

(三原重庸)

左衛門佐印

(山田有米)

民部少輔印

(鎌田盛近)

出雲守印

(川上久國)

左近將監印

〇六五一 三原重庸外三名連署引付

覚

一木之前書可被出時分、寸尺少も無相違様ニ入念可被書

出候、若於緩候可為越度事、

一竹木之物之道のり細ニ前書に可被相記事、付竹有所

念入可書出事、

一船木屋材木ニ可成木見分候而書可出事、

一風折木之材木并残楷木、其折ニ書記可被指出事、

一御狩代錢之儀、其所之嚶衆首尾候而、山之納同前ニ上

納可被申事、

一御狩如為相定可被入念事、付狩不參之衆者前ニ様ニ科

錢可被申付事、

一其所之竹木伐取間敷事、付松之かたはらうつましき

事、

一右條ニ於相違者、至嚶衆行司ニ可存其沙汰候、巨細之

段喜入丹波守殿・和田乘介殿可被申達候間、右兩人へ

可有首尾者也、

喜入 肝付三郎四郎殿

伊地知志广守殿 蓋貴理師且改奉行ナリ、

寛永十六

二月廿五日

(山田有榮)
民部少輔印

(鎌田政近)
出雲守印

(川上久國)
左近將監印

(三原重隆)
左衛門佐印

喜入

五月、貴理師且改ノ吏ニ就テ重テ條々仰渡サル、

○六五二 肝付兼屋達書

覚

一 貴理師且宗改ニ付、諸外城ニ他國人居付久敷罷居候者并近年居付候もの、在郷町濱ニ至迄一人も不隠様ニ可被仰付之事、

一向後手札不持者、其所ニ被召置ましき事、

一 外城并一所衆与家中不取様ニ其間得候間、それ〳〵之地頭へ堅被申渡、しまり候やうに可被申付之事、

一 衆中在郷ニ至まで、御法度之条ニ慥被申付、走者抱置候者五人与稠敷罪科可被仰付之事、

一 貴理師且宗在之外城者、向後地頭可存候間、若緩之儀在之者、地頭可為越度之由、堅可被届置之事、

寛十六卯
五月三日

如右之此節被仰出候間、委承届候通御条書ニ致判候間可相守、内之衆・百姓・町衆不残一トニ無緩可被申付候、自然猥成儀共於有之者、役人衆可為越度候、於様子者早ニ可被申出候、以上、

三郎四郎

喜入領内役人衆中

六月、太守光久君御家督ノ後始テ入國給フ、七月朔日、台命ヲ述テ花奢ヲ停メ教誡ヲ下シテ法禁ヲ守ラシメ、凡國政ハ先君ノ遺法ニ違フヘカラス、逸遊ヲ遠ケ武道ヲ嗜ムヘキノ旨、數箇條ノ訓辞并風儀ヲ矩シ、衣服ヲ定メ忠信ヲ導キ利欲ヲ逆ル等ノ式條ヲ令シ行ハル、

〇六五三 島津光久条書

被仰出条々

一 今度歸國以前、於御城 公方様御直ニ被仰聞候趣者、
國中不奢、萬花麗之儀無之様ニ可申付之旨、御意候
間、各可得其意事、

一 國中諸沙汰之儀、黃門様御時に不相替様ニ可申付事、
一 諸士諸事氣任之儀於有之者、曲事之段彌可申付事、
一 きりしたん宗之儀、當家代ニ禁制之處、近年ハ 天下

之御法度稠被仰出候ニ付、弥令其沙汰候之間、此宗躰
之儀片時も不差置不可有緩事、

一 於江戸被 仰出候御法度之趣、不相背様ニ連々心掛可
入念事、

一 自然於天下御弓箭共於有之者、別而可致御奉公候間、
諸士連々武具馬鞍等嗜、軍役可相勤心懸可為肝要之
事、

一 酒女之儀能々可相嗜事、

一 黃門様被仰置候儀不相違可申付候、自然其旨相背輩於
有之者、少も無用捨其科可申付候間、能々可承置事、

一 諸士知行ニ相懸出物未進無之様ニ可相調儀肝要ニ候、
然者不入儀ニ費米錢、花麗かましき儀一切令停止、出
物軍役等可相勤心遣不可致油断事、

(江戸御條書之内)
覚

一 刀寸尺貳尺八寸より上、脇指之尺卷尺八寸より上、同
朱さや大かくつはの事、

一 下々の者下ひげ・つりひげ并ひたい大なてつけ大そり
さけ之事、

一 小者共袖へり上下の帯絹之事、

一 結徒黨致荷擔、或妨をなし、或落書張文・博奕・不行
儀・好色其外ニ不似合事業仕へからざる事、

一 大身小身共に自分用所之外、買置商買利潤のかまへい
たすへからざる事、

一 一かち若黨衣類、さや・ちりめん・平嶋・羽二重・絹・
紬・布・木綿之外停止之事、付弓鉄炮之もの絹・紬・
布・木綿之外不可着之、小者中間衣類萬ニ可用之事、

一 物頭諸役人万事ニ付而不可致依怙、并諸役者其外之品
ニ常に致吟味、不可油断事、

一上意之趣、縦如何様之者申渡といふ共、不可違背事、
右條ニ無緩疎可相守者也、

卯七月朔日

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」三〇号文書ト同文ナリ)

八月日考所ナシ、 太守光久君御妹米壽君婚姻ノ義、

仁禮藏人某ヲシテ、 尊命ヲ奉ラル、

傳云、御妹君御母ハ嶋津備前守忠清薩州義虎ノ男
出水城主也

ノ女心應慶安大姉也、 前ノ太守黃門君ノ嫡夫人

國分ニ御退隱ノ後、御父 龍伯君ノ正統國家相

承ノ義ヲ強チニ御心ニ掛サセ給フ折節、御姉君

義虎ノ孫ノ姫君十三歳ニナラセ玉フ頃、御齒

黒初ノ爲トテ國分ヘ詣テ到リ玉フ、國分君始テ

御對面ナリケルニ、美目貌チウルハシク世ニ類

ヒナキ御粧ヒナリシカハ、暫シカ程留メヲキ進

ラセラレ、其人トナリヲ試ミ玉フニ、御心サマ

萬ツ舉動玉ノ氣粧、自ラ婦人ノ徳ヲ具ヘサセ給

フ、故ニ躬ヲ御媒アリテ麗嶋ヘ納レ進ラセラレ

シトカヤ、 黃門君一タヒ見ヘサセ玉ヒシヨ

リ、他ニ異ナル御覺ニテ、御寵愛日ニ重リ月ニ

添テ頓テ若君御誕生マシク、打續キ男女ノ公

達五人マテ儲ケサセ給フ、一ハ 國分君ノ御養

君トシテ御嫡子ニ立セ給フ、忝クモ 當太守光

久君是ナリ、次ハ式部公トテ、庄内北郷家御相

續、都ノ城三万石ヲ領シ玉フ、其次ハ玄蕃公、

右典殿忠將一流ノ後嗣トシテ、隅州垂水壹万五

千石ヲ領シ給フ、姫君二人、姉姫君ハ嶋津大和

守某ノ家ニ入セラル又助忠清ノ母公、妹姫君即我

小君也、此君東武ニ於テ御誕生ナリシカハ、

公方家ヨリ品メ拜賜ノ物ナトアリシトカヤ、斯

テ御幼稚ニシテ御母公ニ後レサセ玉ヒシカハ、

民部卿ノ局トカヤ、甲斐メシク育シ齋キ奉リ、

御國ニ下ラセ玉ヒテヨリハ、東ノ丸ニ御座シ、

今茲十六ニナラセ玉フトカヤ、シカルニ御兄式

部公 兼屋公ト更ニワリナキ御交リニテ、這辺

那邊且暮御語ヲヒ髮結月代ヲモ折節ニハコナタ

ニテメサセ玉フ程ノ御懇志ナリキ、故御縁ノ稟

モ此公ノ執シ申サセ玉フニヤト云アヘリ、

八月廿八日、式部公御妹君御同道ニテ入ラセラ

レ、今日俄ニ御婚禮ノ儀式遂行ハル、新納加賀守

澁谷四郎左衛門尉以下ノ御親戚、諸夏ヲ計ヒ沙汰

セラル、

九月日不記、五目ノ御賀ニ 太守君渡御、今日、

公字ヲ伴兵衛尉ト更メ賜ラセ玉フト云ヘリ、

十月廿六日、夫人ノ御知行目録ヲ賜フ、

○六五四 八木長次郎・二階堂阿波守連署知

行目録

横峰屋敷

坪付略之

合粃大豆百五拾三表二斗七升九合

鈴子門

坪付略之

合粃大豆百九拾五表壹合

惣合粃大豆八百拾貳俵三斗一升四合

高ニシテ貳百九拾六石三斗七升

右者、先年從 公儀被成御借銀候、為御返弁高粃石ニ

付銀子四拾三匁之算用を以 公儀被召上候、任其例、

近所ヲ毛上之直成にて令支配者也、

御支配所印

寛永十六年十月廿三日

二階堂阿波守印

八木長次郎印

有田門

坪付略之

合粃大豆貳百拾壹石一斗四升五合

堀ノ門

坪付略之

合粃大豆貳百五拾貳表二斗三升九合

○六五五 三原重庸書下

右者、先年於江戸、御姫様御物之綿子 公儀へ被召仕候、其代銀八匁之利足にて、本利銀拾貳貫目ニ罷成候、借状を鎌田源左衛門殿手前にて為使由、書物被出候間、拾貳貫目返弁として相渡申候、後日借状出候共、此御知行にて右之銀子返弁方相濟候間、不可及矣儀者也、

寛永十六年

十月廿六日

三原左衛門佐印

肝付伴兵衛殿上様

御役人中

○六五六 二階堂阿波守・八木長次郎連署知

行目錄

喜入下名村之内

浮免

坪付略之

合粃大ツ六拾三表三升壹合

高ニシテ廿三石壹合四才

右知行、市來衆中より永代ニ御買被成候替地として令支配者也、

寛永十六年

十月廿六日

御支配所印

八木長次郎印

二階堂阿波守印

○六五七 新納忠清外二名連署知行目錄

下露之門

坪付略之

粃大豆百四拾壹表八升

早迫屋敷

坪付略之

粃大豆貳十八表二斗三升三合

浮免

坪付略之

粃大豆四拾壹表壹斗五合

合粗大豆貳百拾壹俵六升八合

高ニシテ七拾七石

御支配所印

寛永十一年六月廿四日

高崎伊豆守印

山田民部少輔

新納加賀守印

押札ニテ肝付伴兵衛ト有之ト云ヘトモ、夫人ノ御高ナリ、
按スルニ、寛永十一年猶 城中ニ在スノ時ナリ、而レハ
全十六年御輿入以後、公ノ高ニ相加ラル、ナルヘシ、

十七年庚辰

○六五八 川上久国外三名連署達書

覚

一 普請場ニ日出時ニ可差揃候、遅ク罷出候もの者、其
日之普請之人数ニ可相除候、晩者奉行下知次第可罷歸
候事、

一 罷出候衆、以日記奉行衆迄毎日届可申候、後日可遂算

用候事、

一 晝食普請場ニ而可被下事

一 奉行衆之下知相背間敷事、

一 喧嘩口論可爲停止事、

右、守此旨、井手溝堤築之御普請等堅固ニ可相勤者也、

正月十一日

(鎌田政近)

出雲守

(三原重磨)

左衛門佐印

(山田有榮)

民部少輔印

(川上久國)

左近將監印

十八年辛巳

四月廿日、夫人御産、若君御誕生、

太守光久君即チ光臨アリテ、醫師等ヲ召シ寄ラレ

診候セシメテ後 還御、夜ニ入テ再ヒ 渡御、

若君七夜ノ御祝アリテ、米鶴君ト號セラル、

御産弓 郷右衛門兼隆公

御乳 新納十右衛門久明妻、

六月、夫人ノ御領薩州河邊ノ郡高田村ノ目錄ヲ改

メ賜フ、

○六五九 諏方神左衛門尉・毛利肥前守連署

知行目録

知行名寄帳

原口屋敷人馬略之

坪付略之

合田畠屋敷壹町九反五畝廿九步

糶大豆八拾貳俵壹斗七升七合

高ニシテ三拾石八升二勺一才

宇都屋敷之内

坪付略之

合田畠貳段六畝十四步

糶大豆拾壹俵三斗壹升

高ニシテ四石三斗三升三合三勺三才

大次木屋敷人牛馬略之

坪付略之

合田畠三町六反二畝拾壹步

糶大豆百拾四俵壹斗六升四合

高ニシテ四拾壹石七斗三升三合三勺三才

惣合高七拾六石壹斗四升六合八勺七才

右知行、伊東仁右衛門尉殿圖取知行之内、東之丸小御

姫様御買被成候間、名寄相改者也、

寛永拾八年六月朔日

御支配所印

毛利肥前守印

諏方神左衛門尉印

按スルニ、東ノ丸小御姫様我 夫人ノ御支ナリ、

御婚禮ノ後タリト云ヘトモ、猶舊ニ依テ如是當時唱ヘ

ケラシ、

十九年壬午

四月、御所帯ノ事ニ就テ訴訟ノ義仰上ラル、

○六六〇 肝付兼屋覚

覚

一先祖以來老万石余にて御奉公申來、其後五斗出来四分

老之上地ニ少身ニ罷成、弥軍役不罷成ニ付、元和三年

丁巳出銀本利三貫八百五十目行迫、知行高五百五拾

石、同四年戊午之五月、山田民部少輔殿頼申上置申

候、去年迄廿四ヶ年ニ罷成候、右出銀之未進銀、公儀

御算用管合申者、可被返下候通、數度御詫申上候へ

共、于今不被返下候、定御公儀難御成儀も御座候へん

哉、雖然我等祖父菱刈御弓箭之時分も一入盡粉骨御奉

公可被申儀、無其隱事候、ヶ様ニ御奉公申來、子孫我

等代ニつふれ終可申事迷惑ニ存申候、ヶ様ニ行迫申候

事、持留之高之内過半惡地にて、所務然々無之、彼是

以軍役難續候て、此一兩年之御出来も百三十老石致未

進候事、

一右上置申候知行高五百五拾石、廿四ヶ年納方大方算用

申候、高老石ニ付貳斗七升代ニシテ納米三千五百六拾

四石代銀ニシテ百六貫九百目余、如此にて候間上置

候、知行為御加増可被返下事候、此一兩年出来未進分

様可預御披露候、

寛永十九壬午

四月廿八日

町田勘解由次郎殿

平田狩野介殿

肝付伴兵衛尉

〇六六一 肝付兼屋覚

覚

高老万石余

加治木一所

溝邊六ヶ名

内

一五千石余

五斗出来未進ニ付諸人並ニ被召上候

事、

一八百五拾六石余

祖父彈正一節世次無之ニ付、伊集院

右衛門太夫入道殿三男養子ニ御定

候、右衛門太夫入道殿惡心之時分、

為科分被召上候事、

一千五拾石

四分一之上地、

一五百五拾石 元和三年丁巳之出銀三貫八百五拾目

ニ行迫、同四年之五月御公儀へ上置

申候事、

一六百九拾三石 軍役ニ行迫申賣地之高了

残而千九百六拾式石

内五百石 家中之給地

百石 弟伊右衛門殿へ遣置申候、

残而

千三百六拾式石 手前蔵入

寛永十九壬午

四月廿八日

肝付半兵衛尉

五月五日、安樂縫殿助兼時御訴狀ヲ帶シテ江戸ニ

赴クト云云、

縫殿助下向御返詞ノ首尾詳ナラス、蓋御裁拳無シテ徒

ニ帰國スルモノ歟、

八月六日、袈裟寿姫誕生、後ニ嶋津又助忠清ニ

嫁シテ二女ヲ生給フ、

御産弓 渋谷周防某重將長男、後号監物、

今年麗府始テ諸士ノ組ヲ分チ定ラル、公嶋津市

正忠廣公ト太守君ノ庶弟一番ノ組頭トナリ給フ、
加治木腹

〇六六一 島津光久条書

十二月

與頭衆へ被仰出條々

一與中へ野心不忠之者可有之時者、早々可被致言上、若

与頭油断にて於不申上者、与頭并談合衆同意之可為心

底事、

一与中へ喧嘩口事出合候者、早速寄合致談合可相濟事、

一御奉公方之儀談合候て、与頭より可申付事、付出物首

尾之事、

一作病其外御奉公方ニ難澁申氣任之輩於有之者、以談合

致言上、曲事ニ可被申付事、

一與中へ鬼利志端宗并一向宗於有之者、致糺明言上可申

事、

一与中於緩者、与頭談合衆越度たるへく候事、

一 訴訟其外申分之儀、与頭へ尋不申候て、公儀へ雖為申出、請付有間敷候間、可有其心得事、

寛永十九年午十二月十三日

(本文書ハ、「旧記雜錄後編六」二九〇号文書ト同文ナリ)

二十年癸未

正月廿一日、故 貫明存忠公三十三回忌ノ御法克遂行ハル、ニ依テ、諸士各組中ヨリ御折・御樽ヲ献ス、

〇六六三 島津氏老臣条書

與之衆へ被仰出條々

一一与之衆与頭之下知を背間敷事、

一 與頭より可被申付儀可有之時、氣任之輩於有之者、曲

事ニ可被仰付事、

一 御出陳或者在江戸或者狩等之儀可被仰付時、吳儀中間

敷事、付出物首尾之事、

一 喧嘩口論口事等出合候ハん時、与頭へ早々可申入、致

遅々間敷事、

一 訴訟其外申分之儀、与頭へ尋候て公儀へ可申出事、

以上

寛永十九年十二月十三日

(本文書ハ、「旧記雜錄後編六」二九一号文書ト同文ナリ)

〇六六四 某条書

覚

十六代ノ 太守修理大夫從四位下源義久法印龍伯君慶長十六年辛亥正月廿一日逝、享年七十九、法名存忠、号貫明、妙谷寺殿、

一 夜行法度之事、

一 辻哥法度之事、

一 門立法度之事、

右之条々大坂より被仰下候間、いづれも與中可被承届

候、以上、

未六月十一日

正保元甲申

今年ノ春、諸士ノ組ヲ改ラル、公川上上野某・

伊集院右衛門公太守ノ庶弟
加治木腹ト同ニ番與タリ、

嶋津大和守某ノ夫人御姉君知行高百石ヲ我夫人ニ

分チ賜フ、

伊作中里村之内

粳大豆百廿三俵一斗四升八合

一東中間屋敷人馬付略之

坪付略之

合田方八段七步

粳四十九表

合畠屋敷六段貳畦四步(一、二)

大豆六俵三斗貳升五合

二口

合田畠屋敷十町四段二せ十一歩土木籠

粳大豆五十五表三斗貳升五合

菱刈馬越田中村之内

一濱川之門人馬付略之

坪付略之

合田方二町四畦廿九歩(一、二)

蒔式石四計五升八合

粳九拾壹俵貳計七升二合

合畠屋敷三段七步

蒔四計二升三合

伊作中里村之内

一福本之門人馬付略之

坪付略之

合壹町六段八畝貳歩

粳百六俵貳計五升(一、二)

合畠屋敷一町三段九せ一步

大豆十六俵壹斗六升八合

二口
合田畠屋敷三町七畝三步

大豆二俵三斗二升九合

合田畠屋敷二町三段五畝六步

粳大豆九拾四俵二斗五升壹合

一桑壹本 粳壹升

一柿三本 粳三升

一漆苗五本 粳壹升七合

合粳大豆九拾四俵三斗八合上末籠

都合粳大豆貳百七拾四俵一斗一合

高ニシテ百斛

右者、大和守殿奥方より御分地之由候而、高相直

候間、今度名寄相改者也、

寛永廿一年四月廿四日

御支配所印

市来五兵衛尉印

鎌田清次郎印

肝付伴兵衛殿

奥方

今年、御私銀拜借知行高八百四十五石余ヲ返納ノ

爲トシテ差上置カル、但、御知行高ハ相除カレシ

ト云ヘリ、蓋シ去ル寛永十九年御訴訟ニ依テナリ、

〇六六六 平田主殿助寛

寛

高八百四拾五石式斗六升四合三勺壹才者

右者、肝付伴兵衛殿御知行之内、御私方銀子三拾八貫

六拾目被成申請、其御返上として當年より被上置候間、

出物等御賦可有引除候、勿論御物無返濟内御蔵入罷成

被召置儀候、高ニ相直間敷通、御上洛前弟子丸越中守

殿以御意被成如此候、以上、

平田主殿助判

高 御奉行所

公組頭ヲ辭シ、慶府ノ在勤ヲ止テ喜入ニ居

住マシマスモノハ、蓋シ斯時ヨリノ支ナル

ヘシ、而シテ此御知行數年ヲ經テ返シ賜ラ

セ玉フト云ヘリ、實ニ考ル所ナシ、

十月廿三日、鶴千代公誕生、

御産弓

白濱太郎右衛門重昌

二年乙酉

二月八日、去年十二月正保改元ノ由仰渡サル、且

知行高一石ニ付テ出銀二分、去年ノ出銀ニ増分并

ニ男女老若殘ラス一人ニ二分充ノ御合力銀ヲ課ラ
ル、

三年丙戌

正月廿四日、米松公喜入ニ誕生、

御産弓

日高權右衛門爲春

四年丁亥

七月十七日、米千代姫喜入ニ誕生、

御産弓

新納十右衛門久明

將軍家大猷院家光公方我 太守光久君ニ命シテ犬追

物ヲ興行セシム、由是 公射手ノ人數ニ選ハレテ

江戸ニ赴給フ、月日考ル所ナシ、

御供

執事安樂才右衛門兼時

代官日高權右衛門爲春

新納彌左衛門久行 志々目次右衛門義孝

隈本諸左衛門宗仁

中野治部左衛門

山口宮内左衛門

岩田正三郎篤往

小者一人・中間二人・足輕一人・下部三

人、以上、

十一月十三日、將軍家諸大名ト共ニ武州王子ノ

原ニ出御、犬追物ヲ御覽セラル、我 太守預メ、

台命ヲ蒙テ攸ヲ相、馬場ヲ開カシメ、垣ヲ構ヘラ

ル、老若貴賤山ノ如ニ漫リ雲ノ如ニ聚ル、實ニ天

下ノ壯觀希世ノ大勤ナリ、是ニ於テ我 太守令ヲ

傳テ數十騎ノ射手及檢見・喚次以下ノ職掌ヲシテ

彼馬場ニ臨マシム、各法式ノ裝束ヲ刷ヒ、逸物ノ

馬ヲ飾リ其出立奇麗ヲ盡サスト云コトナシ、靜々

ト垣ニ傍ヒ繩ニ倚テ備ヲ設ケ、列ヲ爲シ、既ニ犬

ヲ放ツニ及テ、東西ニ騁セ南北ニ追ヒ、左手ニツ

ガヒ馬手ニ遇ヒ、筋違カヘリミヲシモチリ、疾風

迅雷ノ勢ヒ、鎌倉流ノ奥義ヲ振ヒ、小笠原ノ秘術

ヲ盡シテ、何レモ得タル道ナレハ誰レ劣ルヘクモ

ナク、數刻ノ中ニ首尾一失ナク、大儀成就シケレハ、公方ノ御感淺カラス、滿場見物目ヲ駭シ稱嘆セスト云モノナシ、我太守ノ威勢、諸大名ノ羨思、中々筆紙ニ盡シ難シト云ヘリ、

同十六日、御家老ヲ始職掌ノ族、射手ノ面々、召ニ應シテ登城、公方家ニ拜謁シ奉リ、各禄物ヲ賜フコト差アリ、公時服四領ヲ拜賜セラル、

十二月二日、二ノ丸御殿ニ於テ、大納言家嚴有院家綱公ニ拜謁シテ時服二領ヲ賜フ、啼ニ声譽ヲ一時ニ輝スノミニアラス、名姓ヲ後記ニ留メテ無窮ニ傳フ、豈ニ清平世ノ大功ニアラスヤ、

〇六六七 犬追物御覽記

正保四年丁亥十一月十三日、於武州王子原御犬之時

射手組 但上手犬七疋

嶋津諸右衛門中矢一ツ

鎌田又七郎殿

本田甚兵衛

上井采女

嶋津弥市郎

吉田長四郎

本田久左衛門

嶋津又右衛門

肝付伴兵衛

福屋助左衛門中矢一ツ

種子嶋爲兵衛

嶋津四郎左衛門

檢見嶋津芳庵 喚次嶋津源右衛門

執筆福屋伊賀 幣役福崎新三郎

次手組 犬七疋

嶋津市正殿

嶋津源介殿中矢一ツ

嶋津七兵衛

本田六左衛門

嶋津作左衛門

入來院石見

村上内記

村上左京

仁禮左近

嶋津長門

山田弥九郎

嶋津中務

檢見嶋津又左衛門 喚次嶋津佐太夫

執筆・幣役右同人

下手組 犬七疋

嶋津安藝殿中矢一ツ

嶋津主計

平田兵十郎

柏原弥太右衛門

種子嶋二郎右衛門中矢二ツ

嶋津助六

本田右衛門

嶋津縫殿中矢一ツ

菊池太右衛門

嶋津又次郎

伊勢兵部殿

嶋津上野

檢見嶋津又左衛門 喚次嶋津佐太夫

執筆・幣役右同人

右之手組、鬪取ニ而一立相濟、射手木屋迄

被爲引取候處ニ追付御乞犬有之、

御乞犬一手組 犬十疋

嶋津市正殿中矢一ツ

伊勢兵部殿

種子嶋爲兵衛中矢一ツ

嶋津七兵衛中矢一ツ

嶋津主計中矢二ツ

村上左京

福屋助左衛門中矢一ツ

村上内記中矢一ツ

嶋津上野

嶋津又右衛門中矢
一ツ

種子嶋次郎右衛門中矢
一ツ

嶋津安藝殿

檢見嶋津又左衛門 喚次吉田久兵衛

執筆福屋伊賀 幣之役税所弥吉

右御乞犬殊外大出來仕、

公方様御感不斜候、

射手奉行 新納刑部 伊東仁右衛門

射手支度衆 伊集院堅吉 右松五右衛門

有川十右衛門 有川双之丞 吉田喜兵衛

富山主水 鎌田次右衛門 三原九兵衛

有馬郷兵衛 野村右馬 伊勢早左衛門

酒匂利左衛門 猿渡堅介 伊東元右衛門

三嶋林右衛門 東郷六左衛門

伊集院弥左衛門 入部五右衛門 平瀬忍兵衛

伊地知志賀

射手道具取嚙役人

坂本少右衛門 木村平右衛門

射手木屋ニ而馬立様下知衆

肝付彦兵衛 永山用右衛門

大垣兩口犬指引衆 三原内膳 川野弥太夫

弟子丸市之助 堀之内越右衛門

犬かけ衆 加治木曾藤兵衛 丸野嶺右衛門

津留六左衛門 長田弥左衛門 林仲之丞

池田五角 中馬喜角 堀之内造酒允

大放衆 泊大左衛門 隅元与右衛門

神崎諸右衛門 野添對馬 羽山五左衛門

犬奉行 二見二左衛門 酒匂右馬介

一 下宿より射手木屋迄三町程有之、朝日出ニ射手

衆備ニ而射手木屋ニ被參候、此間ニ平塚大明神

被爲立候所ニ而下馬、馬ハ何も大房ニ而一段と見

事ニ而候事、

一 射手衆・役者衆、又侍・中間・小者・草履取以

下迄、從 公方様御振舞可被下旨兼日被 仰

出、御馳走者木屋ニ而朝五ツ前ニ何も御振舞被

爲給候、又侍・中間以下ハ御振舞御免被成可被

下通、前日伊豆殿江御断御申上、正日ニも又是
非共達而御申被成候ニ付、不被下候、御兩殿
様も御振舞之筈ニ而候處ニ、今度王子ノ御普請
奉行多賀左近殿・眞田長兵衛殿被仰候ハ、於
御城御饗應御給被成候間、左様ニ御心得可被成
と被仰ニ付、御馳走者木屋ニ而上リ不申候、御振
舞調手御代官熊澤彦兵衛殿・高室喜三郎殿也、
料理福田五左衛門殿、給仕間宮諸左衛門殿組之
步行衆三十人也、

一 上覽之御殿ハ南向犬棧敷ニ、二重瓶子御飾有、
犬垣ノ外東南西三方ニ墓目かさり有、御殿御普
請奉行多賀左近殿・眞田長兵衛殿、犬垣ノ普請
奉行ハ此方より相良主税・平田藤右衛門、押ハ
鎌田源左衛門、付衆餘多有之、下宿普請奉行新
納小右衛門・有川与左衛門、付衆有、
一 公方様五ツ過ニ出御、四ツ時分より御犬初ル、
壹万石以上ノ諸大名并御旗本衆可被致見物旨、
去十二日ニ被仰出、如其各御見物候、薩州様

御兩殿之御棧敷より御覽、又三郎様ハ御乞犬
之時、犬垣西之角より嶋津万壽殿御同道ニ而御
覽、何も御褒美不大形候、

一 犬追物終、追付 御兩殿様共ニ 御前ニ御參、
御直ニ御承候ハ、年來可被懸 御目と被存儀相
届、天氣好御悦喜ニ 思召旨御詫、御盃被遊
御頂戴候、薩州様江貞宗御脇指、又三郎様江
國行御刀御拜領被成、無殘所御仕合ニ而候、左
候而、公方様ハ七ツ時分ニ 還御、殿様ハ
日入時分ニ王子御立、直ニ御老中へ御礼ニ御出
被成候、

於王子從此方御進上物

- 一 國綱御刀一腰 代五百貫
- 一 御杉折三合・鯛一折五枚
- 一 御樽五荷
- 右ハ 公方様江 薩摩様より
- 一 光包御脇指一腰 代五百貫
- 一 杉折二合・鯛一折五枚

一 御樽三荷

右ハ 又三郎様より

一 杉折二十 一樽十荷

右ハ王子御供衆相中へ被遣候、此日 御城へ上
リ候御進上物、

一 御杉折二合 一鯛一折五 一御樽三荷

右ハ大納言様へ 薩摩様より

一 御杉折壹合 一鯉一折五 一御樽二荷

又三郎様より御進上、 大納言様ハ犬追物不被

成 上覽候、

一翌日十四日ニ爲御礼御登城可被成哉と酒井讃岐

殿・松平伊豆殿へ御尋候へハ、 十六日ニ可然と

相極、射手衆被召列候様ニと、伊勢兵庫殿御年

寄衆方御承候者、昨日御登城被成、 御目見相

濟、其上射手 御目見御小袖拜領候、 御兩殿

様へハ御拜領無御座候、

大納言様江者 御目見も昨日ハ相延候、

(本文書ハ「旧記雜錄追録」一八二号文書ト同文ナリ)

慶安元戊子

閏正月、 公江戸ヨリ歸リ至、

八月朔日、御太刀献上ノ序ヲ改ラル、

古來舊功ノ士一所ノ私領アル分限ノ輩ヲ一所衆
ト稱シ、八朔ニ使者ヲ以テ御太刀・馬代之ヲ献

シ、且 太守君ヨリ賜フ所ノ御太刀目録、使者

ニ相渡サル、御氏族・他家ノ面々尤先後ノ序ア

リ、

○六六八 肝付兼屋覚書

慶安元年八朔之御太刀、從前代敷根殿前ニ上來

候、然處、右之敷根殿嶋津筑前守殿ニ御成被成

候、此八朔より筑前守殿御太刀先ニ可上候、若又

後年彼敷根殿、如前々御名乗可被成時者、肝付之

家より後ニ可被為上候間、其旨被仰聞せ候、御使

喜入吉兵衛尉殿・諏方木工右衛門尉殿を以被仰聞

候、則惣領之肝付三郎兵衛尉殿へ前田善兵衛を以

相尋候者、口能有間敷と御座候間、彼八朔より敷

根殿御太刀先ニ參候、御使衆へ申入儀者、從公

御供

儀被付置候白濱太郎右衛門尉を以申上候、於御

攝執安樂主馬兼昌 代官吉牟田主右衛門

屋形被聞召候而相濟申候、時之御家老衆嶋津圖書

限本諸左衛門宗仁 中野治部左衛門

頭殿・川上因幡守殿・山田民部少輔殿御三人にて

新納密右衛門久重 前田善兵衛

候、御談合衆と候者、敷根筑前守殿・鎌田源左衛

中野九兵衛 二見平右衛門

門尉殿兩人也、為後證如此候、

小者 足輕 人足

慶安元年戊子

御帰着ノ月日詳ナラス、中野九兵衛江戸ニ於

七月廿九日

肝付伴兵衛尉 兼屋

病死スト云ヘリ、

白濱太郎右衛門重昌ハ、夫人ノ膝臣、寛永廿一

九月、太守光久君喜入ニ光越、時ニ公達三人
御前ニ於テ元服、太守君共ニ加冠シ給フ、嫡子

年ヨリ承應三年ニ至テ、當家ニ仕ヘテ外内ノ政支

米鶴九十歳伴三郎兼善ト號ス、嶋津東市正忠廣公

ニアツカレリ、薩州阿久根ノ士ナリ、

理髮タリ、二男鶴千代丸七歳伴介兼雄ト號ス、嶋

二年己丑

津安藝某公理髮、三男米松丸五歳三次ト号ス于時太守君

正月十六日、米松公 太守君ノ御養子トナリ、

ニ從テ 理髮ハ川上因幡某、各御脇指一腰充拜領

城中ニ入給フ、時ニ四歳、

シ玉フ、御滞在ノ中、様々ノ御遊興アリ、月ヲ逾

三年庚寅

テ 還御ナリヌト云ヘリ、

正月日不記、公使ヲ奉テ江戸ニ赴給フ、

十月廿四日、綱貴君江戸ニ御誕生、

蓋、年頭ノ賀使也、疑クハ前二年ノ支歟、

十二月、江右衛門兼隆公本田作左衛門尉良親本田

氏ノノ尊養子トナリ、本田市右衛門尉道親ト號シ
宗族
給フ、後ニ四郎右衛門ト改ラル、
同月廿四日、公府大饗ヲ行ハル、

〇六六九 評定所布達留帳書抜

與頭衆江被仰渡留帳書抜

御拝領之鶴御開并江戸

御誕生之爲御祝儀、來ル廿六日ニ麿島衆中人

躰はかり不殘、御振舞可被下候由上意候、御

城ニハ御能御座候間、於客屋可被給候条、朝

之五ツ時ニ此三与之人數被罷出候様ニ御与中

へ可被仰渡者也、

慶安三年
十二月廿四日 評定所

朝之五ツ時ニ御与中御振舞之衆

嶋津安藝殿 嶋津市正殿 嶋津又十郎殿

肝付半兵衛殿 穎娃右京殿 吉利下總殿

同四ツ時

町田出羽殿 新納四郎左衛門殿 伊集院源介殿

佐多又四郎殿 種子島左近殿 嶋津主計殿
樺山源三郎殿 樺山長門殿 澁谷石見殿
同九ツ時

伊集院右衛門殿 根占七郎殿 鎌田又七郎殿

川上上野殿 川上將監殿 北郷作左衛門殿

嶋津中務殿 新納又左衛門殿 諏方甚左衛門殿

八ツ時 八ツ時

伊勢兵部殿 嶋津彈正殿

嶋津豊前殿 嶋津圖書殿

山田彌九郎殿

右十壹与ヲ三与宛書付、四時ニ客屋へ、

与中之者可被罷出由申渡候、

按スルニ、公正保元申ノ年、川上上野某・

伊集院右衛門公ト同與トナル、而シテ今嶋津

安藝公ト一番組トナリ玉フモノ何ノ年ヨリト

云コトヲ知ラス、

四年辛卯

四月、夫人喜入下村ノ鹿倉ヲ拜領シ給フ、

〇六七〇 給地変更申渡書

慶安四年卯四月朔日ヨリ十五日迄

御用番北郷佐渡殿

四月七日

一御立前ニ肝付半兵衛殿奥方給地喜入下名ニ有

之、右村相付候鹿倉、當分指宿へ付有之候、

如以前之喜入之名へ可被付進旨 御錠候、早

ニ可被仰付由、奥方被仰候、兵部殿・源左

衛門殿被間召候、指宿地頭阿多内膳へ右之段

被届、山奉行へ申渡候、右鹿倉可被相渡由、

御返事被成候事、

御使

高崎惣右衛門

御供

與力永山彦右衛門小根占士

執事日高權右衛門爲春爲春先掃國、故ニ志、
々々目義孝爲春先掃國、故ニ志、
々々目義孝爲春先掃國、故ニ志、

志々目源左衛門義孝 代官新納密右衛門久重

前田三左衛門盛貞 御納戸隈本諸左衛門宗仁

中野治部左衛門 岩田彌右衛門篤往

勝目安右衛門 有馬佳右衛門

酒井孝左衛門後号牧仲 山本才左衛門

二見平右衛門

小者 中間 道具者 人足

以上廿五人、

二年癸巳

七月廿九日、 袈裟鶴姫喜入ニ誕生、

御産弓 中村清右衛門清貞

今年隅州小根占ノ地頭職ニ補セラル月日於今考、
ル所ナシ

承應元壬辰

十月十四日、 公使ヲ奉テ江戸ニ赴給フ、御鷹ノ

鶴拜賜ノ御禮使ト云へリ、

與力永山彦右衛門小根占士

執事日高權右衛門爲春爲春先掃國、故ニ志、
々々目義孝爲春先掃國、故ニ志、
々々目義孝爲春先掃國、故ニ志、

志々目源左衛門義孝 代官新納密右衛門久重

前田三左衛門盛貞 御納戸隈本諸左衛門宗仁

中野治部左衛門 岩田彌右衛門篤往

勝目安右衛門 有馬佳右衛門

酒井孝左衛門後号牧仲 山本才左衛門

二見平右衛門

小者 中間 道具者 人足

以上廿五人、

二年癸巳

二月、 公江戸ヨリ帰着シ給フ、

十月、喜入舊府本ノ御館ヲ廃シ、新邑ノ地ニ移シ

テ新宅ヲ造營セシム、今月ヨリ事始アリ、

十二月廿五日、新邑ノ新御館移徙、

三年甲午

三月、 公夫人及公達小根占ニ遊ヒ給フ、

今年ノ秋、慶府ノ第宅ニ歸リ遷リ給フ、岸良清右衛門兼政ヲ出入セシメ家務ヲ委任セラ

ル、是歲ノ春、白濱太郎右衛門重昌死スルニ依テ也、

十二月、鳴津又助忠清公結納ノ祝物ヲ贈ラル、

明曆元己未

今年知行高五百五十石ヲ返シ賜フ、

〇六七二 目錄奥書写

舊ノ目錄ノ奥書寫

右知行、御妹様被成御座候處、臺所續兼候由被聞召上、爲御手付被爲給候旨、御家老衆任御引付、令支配者也、

明曆元年未八月十三日 岩切嘉左衛門印

菱刈孫兵衛印

比志嶋内記

新納縫殿印

右御知行五百五十石 兼武公ノ御時、元和四年午ノ五月、出銀上納ノ方ニ差上置レ、連々御訴訟アリト云ヘトモ、御許容ノ沙汰モナカリシカトモ、今別義ヲ以テ拜領シ玉フ、併知行高元ノ如ナレハ、連々ノ御訴訟ニ依テ茲ニ及モノナラン、實ニ夫人ノ故ニアラスシテ何ソヤ、

故活堂公御退隱ノ時ニ及テ、兼柄公ニ囑シ給フテ曰ク、弟子丸與次右衛門某ノ衷、向後ニ於テモ敢テ疎遠ノ義ナク御懇志ヲ遂ラルヘシ、桃外院殿ノ御時、知行高御加増ノ義、彼祖父越中某專ノ執シ申サルニ依レリ、其外御身上ノ事ニ付、御訴訟旁且壽仙院殿御縁辺ノ儀等、此人ノ執持ニテ、當家ニ就テハ別シテ信切ヲ盡サレシ条、聊其宿恩ヲ忘レ給フヘカラス、執吏ノ面々ヘモヨリ々此旨ヲ承知シ奉置ヘキモノト云々、御使白濱太郎八勤之、

二年丙申

正月元日、公出朝ナシ

古來一所太刀進上ノ面々、二日ニ御礼アル

故、元朝ノ出仕ナシト云云、

夫人御登城、姫君三人同道シ玉フ、

一目箆 瓶子一雙

新御前ニ御持參殿、蓋シ世子君ノ御、二ノ丸ノ云ナラシ

一鈴六双 女房三人エ

正月二日、公御太刀持參、

夫人御登城、袈裟壽姫御同道、

一目箆五飾 瓶子五双

御子五人エ

一鈴十双

御袋五人エ

一仝二双

三次公エ

一仝二双充 女房中エ

右、御持セナリ、

正月六日、公谷山ノ菟ニ組下ノ士卒ヲ帥テ征役、

同七日、夫人 新御前ニ詣シ玉フ、

同月十一日、小根占ノ有富四郎右衛門・小牧孝左

衛門及衆中ヨリ數輩參礼、同十二日、諸役人等來

テ年頭ヲ賀ス、

五月朔日、公夫人公達ト共ニ喜入ニ遊ヒ玉フ、

六月下旬、太守君喜入ニ 光越、月ヲ逾テ 還

御、

八月朔日、御太刀進上、新納彌左衛門久行御使タ

リ、

同月十五日、三次公佐多又四郎久孝ノ髻養子ト

ナリ、遺跡相續ノ 高命ヲ奉ラル、喜入五郎兵衛

某コレヲ傳フ、

同十七日、公夫人加治木ニ往玉フ、 高命ニ依

テ於西姫ノ婚禮ヲ補佐シ玉フ故也、

岸良清右衛門 夫人ニ相從ハル、女房八人乘

物ニテ陪ス、往復共ニ仕丁數十人、傳馬公府

ヨリノ課ナリ、

一白銀三十兩 廳府ヨリ拜領

一青銅三百疋 加治木ヨリノ祝物

右ノ如ク加治木ニ於テ公夫人銘々御祝物有之、

全十九日、公加治木ヨリ帰玉フ、夫人ハ

太守君ニ從テ直チニ隅州國分ノ小村ニ遊ヒ玉フ、

九月七日、夫人小村ヨリ還御、

同月十二日、三次公繼目ノ御禮、太守光久君

ヲ拜シテ、佐多三次久利ト稱ラル、後ニ三郎兵

衛、又丹波ト更ラル、

同月廿二日、久利公始テ佐多殿ニ入給フ、

同廿五日、兼善公・兼雄公喜入ニ遊テ、廿九日

歸府、

十月四日、兵庫公・又八郎公及兩夫人來訪、婚禮

ヲ賀シ且恩ヲ謝セラ、

一昆布一折 匏一折

一酒双樽

右、御持來、

今日、加治木三目ノ賀禮ニ依テ 夫人登城、白銀

二十兩ヲ拜賜セラル、

同五日、夫人加治木ノ第館ニ往訪ヒ給フ、昨日ノ答札ナリ、

一重一組充 瓶酒二双充

右、御持セナリ、

同月六日、來年頭ノ賀使ニ東武旅行ノ預 命ヲ蒙

ラル、諏訪采女コレヲ傳フ、于時 公喜入ニ在

ス、故ニ本田道親公ニ奉ラル、

去月十九日、御鶴ノ拜謝使ヲ命セラレ、既ニ行

粧ヲ支度セラルト云ヘトモ更メテ及茲ト云、

十二月廿三日、小禰寢衆中ヨリ中村清右衛門來テ

歳暮ヲ賀シ、酒肴ヲ献ス、

全月廿六日、袈裟壽姬嶋津又助忠清公ニ御婚

禮、

一打迎 宇兵衛某又助公ノ叔弟

一御同心 本田四郎右衛門公夫婦

御祝物ノ次第

一百疋 御打迎

一二百疋 御待付夫婦

一百疋 廣瀬二郎兵衛某又助公ノ叔父

一百疋 庖丁仁此方

一五十疋 小番

一百疋 庖丁仁彼方

一百疋 小番二人全

一中紙十束 御同心夫婦此方

一全 十束 御酌取二人彼方

一全 二束 老者一人 全

一全 五束 大藏卿局 全

一全 二束 御乳人 全

一全 七束 女房中 全

一全 四束 御酌取 此方

一全 二束 御髮寄

又助公ヨリノ御祝物

一百疋 庖丁仁

一五十疋 小番一人

一中紙十束 酌取二人

一全 三束 御髮寄

一全 四束 執夏二人

十二月廿八日、三日ノ御賀アリ、

御鞆入ノ御祝物

一御太刀銀馬代

一鯛二掛 樽一荷

伴兵衛公エ 又助公ヨリ

一青銅三百疋 鯛二掛

一鯛十把 樽一荷

夫人エ

一御太刀 青銅三百疋

伴三郎公エ

一全 全百疋

伴介公エ

一全 全百疋

三次公エ

一 御帶二筋

米姫公・袈裟姫公

一中紙二束 お沢

一 仝 十束 女房中

同廿九日、五目ノ御祝、忠清公ノ第館ニ入給フ、

御舅入ノ御祝物

一 鯛二掛 昆布一折

一 樽一荷

一 太刀一腰 青銅二百疋

又助公エ

一 樽代二百疋

姫君エ

三年丁酉

正月四日、公使ヲ奉テ江戸ニ赴給フ、年頭ノ御

賀使也、

御供

與力別府仙左衛門

執夏安樂才右衛門兼時 肝付良右衛門兼良

松崎仲左衛門兼 隈本諸左衛門宗仁

代官志々目正兵衛義辰 別府長右衛門仙左衛門男
權ニ陪從ス

税所藤右衛門篤往 山口諸右衛門篤刻

永岩市左衛門 佐藤傳右衛門信元

白濱舍人 松田喜右衛門

小者三人 中間・道具者四人 人足四人

以上廿五人、

六月二日、町田出羽公ノ兒子長壽丸ヲ夫人ノ養子

タランコトヲ乞給フ、夫人ヲ之ヲ許シ給フ、羽

州公之ヲ謝シテ樽代五百疋ヲ贈進セラル、

同四日、町田長壽丸來テ夫人ヲ謝セラル、

一 太刀 青銅百疋

兼屋公エ

一 食籠双樽

夫人エ

一 瓶酒二双充

兼善公・兼雄公エ

一 中紙二束充

米姫公・袈裟姫公エ

一瓜一鉢双樽 女房中エ

御饗應アリテ、夫人ノ御字ヲ譲リ玉ヒ、長壽ヲ
改テ米壽丸ト字シ玉フ、供ノ男女ニ至マテ酒食ヲ
賜フ、

御引

一太刀・青銅百疋

公ヨリ 米壽丸エ

一青銅二百疋

夫人ヨリ 出羽公エ

一中紙二束

夫人ヨリ 加治木源右衛門ニ、町田家ノ中歴

八月朔日、御太刀進上、御使新納彌左衛門久行、

十月朔日、兼雄公、阿多内膳忠榮ノ婿養子トナ
リ、同廿二日、阿多氏ニ結納ノ祝物ヲ贈ラル、

鹿児島県史料編さん関係者

顧問

国立国会図書館
客員調査員

前早稻田大学教授

東京大学
史料編纂所所長

委員

桃園恵真

田島秀隆

五味克夫

原口哲哉

晋之口恒雄

館長

副館長

調査史料課長

市来敦志

大島中彬

田嶋平義行

山嶋みちる

松木智子

大久保

竹内

高木

四本

安藤

桑波

尾藤

伊集院

徳平

浜永

伊平

尾集院

利

昭

健

即

直

子

喜

子

子

子

喜

謙

三

作

光

正

興

保

鹿児島県史料

旧記録録拾遺家わけ二

平成2年12月1日印刷

非売品

平成3年1月22日発行

編集 鹿児島県歴史資料センター黎明館

発行 鹿児島県

印刷所 大日本印刷株式会社
東京都新宿区市谷加賀町1丁目1番1号